

『BUTTERFLY WATER』

✽✽

辺り一面、砂だった。二十羽程のカラスが一斉に舞い、アーアーと音を立てている。何層にも重なる奇妙な声の群れ。その異様かつ神秘的な光景に、岩佐久兵衛は釘付けになっていた。

遠ざかるカラスたちをいつまでも目で追ってしまい、徐々に小さくなっていく彼らに感慨深くなる。やがて、先頭のカラスが見えなくなって寂しくなった。すぐさま最後尾のカラスも見えなくなってもっと寂しくなった。そして誰も居なくなってしまったことを知って、もっともっと寂しくなった。

二三度、瞬きをしてから息を整える。吸って、吐いて、吸って、吐いて、吸う。

空と砂の色合いが異なることに気が付いて、わずかに震えた。その境目は、地平線によって二つに区切られている。

ゆっくりと、鼻から息を吐いた。そして又、吸って、吐いて、吸って、吐いて、吸う。

無音という音が耳の中に入り込んでいることを掴んでしまった。今まで味わったどの音よりも細かくて、凶暴で、いつまでも奥底に居座り、消えることがない。その音のない音の存在に意識が向いた時にはもうすでに、漠然とした恐怖に襲われている。

その瞬間を見計らったように、風が吹く。耳に残る風の音が、音のない音を消し去った。ほんのわずかな安心感を抱いた後すぐに、纏わりつく恐怖が、『今生きている』ということを見せてくれた。

いつの間にか、雲が浮かんでいる。この雲の流れを二つの目で追う。流れる雲は、カラスの群れが消えた方角と同じ場所へ向かっていた。

一体、どのくらい歩いたのだろうか？

「オマエの名前は何？」

「岩佐久兵衛」

「俺は、太陽って言う」

「誰に名づけられたの？」

「そんなの聞いてどうするんだ？」

「え」

「そんなことよりも俺の鼻糞^{はなくそ}、食べてみないか？」

「アナタの名前はなあに？」

「岩佐久兵衛」

「私は、空って言う」

「誰に名づけられたの？」

「そんなの考えたことなかった」

「え」

「そんなことよりも私の上腕二頭筋^{じょうわんにとうきん}、覗いてみない？」

「君の名前は何だろうか？」

「岩佐久兵衛」

「僕は、砂って言う」

「誰に名づけられたの？」

「そんなのどうだっていいんだ」

「え」

「そんなことよりも僕のこと、もっと強く踏みつけてくれないか？」

「そなた、名を名乗れ」

「岩佐久兵衛」

「吾輩は、猫である」

「いや、雲だと思うよ」

「なぜそんなことを言う」

「そんなの言われてもそうだからとしか言いようがない」

「せっかく猫になりきって楽しんでるのだから水を差すなよ」

「猫は空に浮かばないよ」

「空に猫が浮かんでもいいじゃないか」

太陽は沈むことなく、雲は浮かびつづけ、空はどこまでも青々としている。一定の間で風が吹き、乾いた砂が辺り一面に広がっていた。

「俺って熱い？」

「私って青い？」

「僕って我がまま？」

「吾輩は、猫？」

どれだけ歩いてもし一向に、眺める景色は姿を変えなかった。いつの間にか目に映る彼らの声が聞こえるようになって、他愛もない言葉のやり取りができるようになっていた。

「私と太陽くんは正直、切っても切れない関係性です」

「おいおい、照れくさいじゃねえか」

「そんなの聞いてないですよ！」と、砂が言った。

「だって言ってるねえもん」

「切っても切れない関係性ってどういうもの？」と、訊ねていた。

「そんなの言えるわけないじゃない。ねえ？」

太陽の頬が真っ赤に染まっている。「別に、照れてねえぞ」

「そんなの聞いてないですよ！」と、砂が言った。

「にやーにやーにやー」

その時、ぴゅーっと風が吹いた。

「雲は、だまってる！」

全員が口を揃えて想いを伝えた。

一体、これは何だろうか？

歩きつづけていると時折、正氣に戻って問いただそうとしている。けれども、答えを見つ
け出す前に又、話しかけてしまう。「太陽さんって好きな食べ物とかあるの？」

「あつたりめえよ、生姜焼きしょうがや。久兵衛は？」

「どうだろう。空さんは？」

「私は冷やし中華ひちゅうかが大好物。砂くんは？」

「僕は激辛料理げきからりょうりが好みです。痛めつけられるのが心地良いんだ」

「ホント変な奴だよな」

「そういうところが砂くんらしいよね」

上空に向かって話し掛けていた。「雲さんは？」

「吾輩は、猫である」

「そんなの聞いてないですよ！」

「にやーにやーにやー」

その時、ぴゅーっと風が吹いた。

「雲は、だまってる！」

依然として太陽は沈むことなく、雲は浮かびつづけ、空はどこまでも青々としている。一定の間で風が吹き、乾いた砂が辺り一面に広がっていた。

なんだか、一枚の絵の中に閉じ込められてしまったような感覚が頭から離れなかった。この場所には朝も夜も眠気もやってこない。それなのに心臓の音は一定のリズムで刻まれている。もう、彼らとのお喋りに何の疑問も抱かなくなってしまった。

「太陽さんから見た世界はどんな景色に見えるの？」

「メラメラ真っ赤に燃えてるぜ」

「空さんは？」

「青く澄んでどこまでも透きとおって見えるわ」

「僕にも聞いて下さいよ！」と、砂が言った。

「砂さんは？」

「もっと華やかに聞いてくれないと答えたくありません」

少しばかり考えてから口を開いた。「華やかとはなんだろうか？」

「もっと痛めつけるってことですよ！」

「熱く抱きしめるってことじゃねえの？」

「清々しく開放するってことじゃないのかしら？」

「にゃーにゃーにゃー」

その時、ぴゅーっと風が吹いた。

「雲は、だまってる！」

「にゃーにゃーにゃー」

全員が口を揃えて想いを伝えた。

「だから、だまってるって！」

言葉を受けた雲は、神妙な面持ちで言い放った。「空に猫が浮かんでもいいじゃないか」

その時又、風が吹いて、我に舞い戻っていく。

そこには、空があつて、砂があつた。地平線が彼らを二つに分けていて、ときたま風が吹いている。壮大な景色はもう、心を揺さぶろうとはしなかった。

本当にこの道を歩いてきたのだろうか？ ふと自身の肉体をくまなく観察していることに気が付いた。一通り観終^{みお}わったときには、口がへの字に曲がり、首を傾げていた。だって、足の裏が腫れても、膝が痛んでも、息が切れてもいなかったから。だからどれだけ歩いたのかなんて分からなかった。

正気を保つために、首を横に振る。空を見上げ、雲の流れを目で追った。余計なことは考えずにとにかく、カラスたちが消えた方角へ向かわなければならぬ、と思ひ込むことにする。

「本当にそれでいいのかい？」

わずかに聞こえるその声に、胸がぎゅーっと締め付けられていく。

「気にせず行こうぜ！」

「歩きつづけるしか道はないのよ！」

「早くカラスに会いましょう！」

「にゃーにゃーにゃー！」

太陽も、空も、砂も、雲も、背中を押してくれた。

「そうだよね」

頭で考えた答えを胸に、再び足を動かそうとする。

「本当にそれでいいのかい？」又、声が聞こえてきた。「何度も何度も語り掛けているのに気が付かない素振りばかり見せてさ」

天と地を二つに引き裂く地平線の存在が、分厚い輪郭を纏^{まと}い、発光していた。

「あれ？」

まるで夢から覚めてしまったかのように、真新しい意識が始まっている。

もう太陽が俺とも、空が私とも、言わなかった。

「そうか」

砂が僕とも、雲が吾輩とも、言わなかった。

「なんだよ」と、零していた。

「ずっと独りぼっちだったのか」

視界に、一匹の蝶々が舞い込んできた。自然と焦点を定めている。

「……」

この蝶々の始まりがどこからで終わりがどこまでかなんて正直、どうでもよい事柄だった。意識は、蝶々を蝶々として捉えることをしなかった。同様、自分自身が岩佐久兵衛であることも認められないでいた。蝶々が自分自身でもあり、自分自身が蝶々でもあるような心持ちが芽生えている。そして、この空間自体が自分自身でもあり、自分自身以外でもあることを素直に受け入れた。一体感……そう、すべてが一体であることを身に染み込ませているようだった。

水の如く舞う蝶々がひとつの象徴に止まった。その象徴の正体がナズナの花びらであることは心得ていた。このナズナの始まりがどこからで終わりがどこまでかなんて愚問そのものだった。どこか懐かしさを感じながら見つめている。どこか懐かしさを感じながら見つめられている。一体になるこの空間に、岩佐久兵衛も蝶々もナズナの花びらも区分する必要なんてなかった。しかし同様に、我は岩佐久兵衛であり、蝶々であり、ナズナの花びらでもあった。このとき、喜びも、怒りも、哀しみも、楽しみも、何もかもの感覚を受け入れているのにも関わらず、その感覚を一切区分することができなかった。それは、どこか親しみのある場所へ舞い戻るような心持ちに似通っていた。

「あれ？」

辺り一面、砂だった。二十羽程のカラスが一斉に舞い、アーアーと音を立てている。ただこれまでと違ったのは、度を越えた暑さが猛然と襲い掛かって来るということ……。空には雲が流れ、地平線によって果てしなさが生みだされている。足元には砂が敷き詰められ、風が風として吹いていた。わずかに、太陽が動くのを感じ取ってしまった。滴る汗を感じながらも、奇妙な声の群れに意識を向ける。

アーアーアー。

崇高な圧を感じ、屈しそうになった。それでも見逃すことなく、群れの光景を目に焼きつけたかと思わされている。そいつを知ってか知らずか、カラスの群れは頭上から離れようとしなかった。

滴る汗の量が、著しい暑さであることを明らかにしていた。ここには、朝があり、夜があった。眠気や空腹に襲われ、心身が蝕まれていくのを実感する。あの、一枚の絵の中に閉じ込められた感覚が、非常に恋しかった。

太陽が沈み始めると、月が現れる。暗闇には星が散りばめられ、ときたま流れていく。空も砂も、何も喋ろうとはしなかった。

一日が過ぎ、二日が過ぎ……。死の足音が耳元で囁いてくる。「時間の経過を肌で感じているのか？」

当然のように、膝から崩れ落ちていく。そして当然のように、渴きが襲ってくる。潤いを求めたくなったが、それでもカラスの群れから目が離せなかった。

どうして？

美しかったから。

とにかく喉が渴いて仕方がなかった。這いつくばるつもりなんてないのに、這いつくばっている。頬にまとわりつく砂が、やけに冷たかった。

でもどうしてだろう。誰か助けてくれよ！

なんて一つも思わなかった。

死の足音が、先程よりも近くで囁いた。「さあ、そろそろ時間だ」

でもどうしてだろう。まだ死にたくねえ！

なんて一つも思わなかった。この苦しみから逃れたいと感じるものの、この苦しみに浸りながらカラスを眺めるのはとてつもなく尊いとも感じていた。

上空に向かって両手を伸ばしている。もちろん、その手が届くことはなかった。羽も生えていなければ、浮かぶこともできない。今更力が漲ることもなければ、真新しい肉体が手に入るわけでもない。

やがて、腕を上げる力も尽きてしまった。それでも、顎を伸ばして、舌を伸ばした。上空を舞うカラスは、構うことなく飛び回っている。

どうしてだろう、心の底から笑っていた。

死の足音が、最後の宣告をする。「なぜ、そこまでする？」

その言葉が引き金となったのか、上空を舞うカラスの群れが一段と大きく飛びまわり始めた。声高らかに舞い、奇妙な音を重ね合わせていく。

アーアーアー？

アーアーアー？

心臓の音が、いつにも増して間近に聞こえてくる。

ドク、ドク、ドク？

アーアーアー？

ドク、ドク、ドク、ドク、アーアーアー？

ドク、ドク、ドク……ドク……。

「……美しいから」

飛び回るカラスが満を持して、その本性を露わにする。

「世直し、世直し、建て直し！」

「世直し、世直し、建て直し！」

「神のお留守をつけ込んで」

「のらくら鯰がふざけだし」

「すちゃらかぼくぼく！」

「万才らくでぐらぐらぐら！」

何層にも重なる奇妙な声の群れが今、意味を成して襲い掛かってくる。

「ああれわさ、これわいな！」

今まで感じていたことすべてが、馬鹿みたいに思えてくる。

「ああれわさ、これわいな！」

今まで考えていたことすべてが、馬鹿みたいに思えてくる。

「ああれわさ、これわいな！」

神のお留守をつけ込んで
のらくら鯰がふざけだし
後のしまつを改めて

世直し、世直し、建て直し
遅れて出られぬ蔵の中

あちこち見つけて藪の中
家から転げて大道中

裸で逃げ出す風呂の中
店ばんはたらくけむのなか

女郎のお齒黒どぶの中
雨降りのじんはとどの中

まがりをおおして家の中
すちゃらかぼくぼく万才らくでぐらぐらぐら

神のお留守をつけ込んで
のらくら鯰がふざけだし

後のしまつを改めて
世直し、世直し、建て直し

ああれわさ
これわいな

群れの中の一羽と目が合ったような気がした。案の定、そのカラスが方向転換、急降下。一目散にこちらへ向かってくる。

カラスの通った道筋には、桜が咲き、紅葉が舞った。不思議だった。カラスの足が三本あるかのように見えた。

「ああれわさ！」

「これわいな！」

心が鎮まる音がする。そいつを味わった瞬間どうしてだろう、自らの世界観に執着していたことを大いに悔やんだ。自分で限界を決め、自分が見てきた景色だけで世界に色を塗っていたことを知った。

カラスが目の前を通り過ぎて方向転換、背後から囁いた。「渴きを味わったものだけにい、潤いへの扉が開くのだあ」

そして颯爽と、右肩に止まる。「すべてを巻き込む覚悟はあるのか？」

目の前に、雲が現れた。

躊躇^{ためら}うことなく浮き上がり、足を掛けていた。途端、今の今まで賑やかだったカラスたちが煙に巻かれ、一羽、一羽と、その姿を変えていく。

あるものは木魚を持ち、あるものは念仏を唱え、あるものはコンチキを鳴らし、あるものは三味線を掲げ、あるものはあるものになった。

雲に乗り、浮かんでいく。風を感じ、どこまでも浮かんでいく……。

三味線を掲げたものが左側に現れ、捧げるように差し出してくれた。そいつを手に取り、身に着ける。その動きは遙か昔から決められていたようだった。

事の成り行きに沿って一つ、身に着ける三味線を奏でてみせた。

音色^{たしな}を嗜むカラスが言った。「両極を敬おう」

その声を耳で味わいもう一度、身に着ける三味線を奏でてみせた。

「闇があるからこそ光が映え、苦しみがあるからこそ楽しみが生まれる。絶望があるからこそ希望がおとずれ、憂いがあるからこそ喜びが舞い降りる。死の存在を感じたからこそ、生の価値が芽生え今、扉の入り口が開いたのだあ」

雲の上の一行^{いっこう}は、風の流れに身を任せ、あるべき場所へと向かっていく。

それこそ世界、

ようこそ世界へ。



岩佐久兵衛の目が、点になっている。
いわさきゆうべえ

服装も肌の色も背丈も言葉も何もかもが異なる世界が、そこにはあった。

暗闇のなかで音が奏でられ、ドク、ドク、ドクッと心臓の鼓動のような重低音が耳に残る。流れる曲が終わりを告げる寸前に、次の曲が流れ始めている。その境目は目には見えないけれど、世界観が一新されるのを誰もが感じているはずだ。

赤、青、黄色。様々な色合いのネオンが輝き、点滅し、暗闇に光を加えている。その明るみが、鳴り響く音と調和し、空間に色を塗る。音に合わせて踊る人々が視界に映っては消える。ひとびと？ それだけでは言い表せない存在も多数見受けられていた。偶発的に、音と光と表情が重なり合った。思わず、見惚れてしまう。しかし心を揺さぶられ、見惚れていることなんて誰も気にも留めないのだろう。

時計は、見当たらなかった。だから時間は分からなかった。朝なのか夜なのか、そもそもここはどこなのか。床や壁には見たことのない文字や絵が散りばめられている。各々が各々の間合いで踊り、騒ぎ、歌っている。目に映る端っこの方では椅子に座って書物に目を通してしている若者が居る。その反対側では寝具を敷いて眠りにについている老人の姿も目に入ってきた。自分と似通った者は一人も見当たらなかった。けれども疎外感とは、全くと言っていいほど抱かなかった。

何者かが声を掛けてくる。彼の肌の色は緑色だった。黒い首輪を身に着けている彼は、背丈が高く、引き締まった肉体を持ち、とても気さくだった。以前どこかで出会ったことがあるかのような眼差しで見つめてくる彼の振舞いに自然と親しみが湧き出てくる。扱っている言葉の意味が一つも分からなかった。彼は三味線を指さし、何やら言葉を吐いている。その時初めて、三味線を身に着けていることを知った。

それから一方的に三十秒ほど喋ったあげく彼は、右手を上げて去っていった。去り際、彼は自身の指先を、鼻先へ向けてきた。独特な匂いがした。歩き方も独特だった。上半身を露わにし、その背中には見たことのない絵が描かれていた。

遠ざかる彼の背中を通して彼との時間を振り返っていた。とても気さくだった。生きていることに充実感を抱いているようにみえた。言葉の意味は分からなかったが、活き活きとした心持ちが伝わってきた。何者だろうか？ わずか六十秒ほどの短い付き合いだったにも関わらず、彼の奥行きを覗いてみたいと感じている。

心が、高鳴っていた。異次元の世界観に身を委ね、染まっていく。なにが善でなにが悪か、なんていう概念からは程遠い中立的な立場が浮遊しつづけている印象がした。

ここには、白でも黒でもないあらゆる色合いが繊細に柔軟に漂い、見える景色を移ろわせていく。決まりごとがないように感じるこの空間、変化しつづける柔らかさが、抱く窮屈さを和らげてくれた。

音楽に統一性はない。流れる音に合わせて踊る人々の動きにも統一性はない。同一の曲を、

穏やかに踊る者もあれば、激しく踊る者もある。両手を上げる者もあれば、床に座り込む者もある。肌の色だって様々だ。赤、橙、黄、緑、青、紫。背丈も身なりも何もかもが想像を越えていく。人間が作りあげた物質だけに囚われることのない壮大さが、本来の姿に照らしを与えているようだった。

ふと三味線に視線を寄せる。そこから、気さくに話しかけてくれた緑色の彼の表情が連想された。力強く惹かれている、と思った。佇まい？ 声質？ 身なり？ 言葉が通じなかったから？ 理由をあげれば幾らでも浮かびあがって来るのだろうか、上げれば上げる程、同等の虚しさも味わう気がしたから、潔く諦めた。

気さくな彼の表情が頭の中を横切った。三味線を差す指先、背中に描かれた絵、黒い首輪、鼻先を掠める匂い、独特の歩き方。彼は何を伝えたかったのだろうか？

その想いを胸に今一度、彼の姿を探してみたが視界に入って来ることはなかった。二三秒、思考する時間に浸る。緑色の彼は本当にこの三味線を指さしたのだろうか？ それとも、あの一連の出来事はすべて幻だったのだろうか？ これから先、彼に出会う機会が訪れなかったら……。ドク、ドク、ドク、ドクツと心臓の鼓動のような重低音が、意識を現実へと導いてくれた。そのままその音に寄り添い、頭の中に漂っているすべてを捨て去ろうとする。だが、わずかな隙間に入り込んできた思考を掴み、嫌気がさす。思考回路は又、振り出しに戻ってしまったようだ。

そもそもここはどこなのだろうか？

五秒という時間が経ったとき、なんだか吹っ切れたように踊りだす。

*

緑色の彼が死んでいる。プールに浮かんだままの状態が続いている。呼吸もしていなければ心臓の音も聞こえない。プールに漂う水の色が赤く染まっていく。血の色は赤色なのか……。妙に冷静な思考に包み込まれていた。プールの向こう側に立て掛けられた梯子に目を向ける。地に着いた梯子の始まりから終わりまでを十五メートル程、上に向かって丁寧になぞっていく。行き着いた先は、緑色の彼が生前、最後に佇んでいた場所だった。一辺が百センチメートル程の正四角形。そのお立ち台を、誰かがいるかのように見つめていた。

徐に、視線をプールへ向けていた。浮かびつつける緑色の彼は、もちろん浮かびつつけている。背中に描かれた知らない絵、滲み出る赤い血……。辺りを見渡す。人々はこのプールに一切の関心を抱くことなく、音を感じ、空間を味わっていた。踊り、騒ぎ、歌いながら各々の間合いで呼吸をしている。プールサイドに佇む者は、岩佐久兵衛一人だけだった。プールに浮かぶ者は、緑色の彼の肉体一つだけだった。二三秒、思考する時間に浸る。手に持つナイフで首筋を切り、そのまま真つ逆さまに落下した。数秒後、水しぶきが上がり程なく、浮かんできた。肉体から赤い色が滲みだし、漂う水と一体化していく。

その光景を目の当たりにしたとき、動かなかった。いや、動けなかった。頭の中では真つ

先に飛び込み、必死になって身体を動かし、緑色の彼の安否を確認するために近づいていく。しばらくして彼の肉体に触れ、心臓の音に耳を澄まし、呼吸の有無を確かめる。慌てて辺りを見回し、大声で助けを求めている。いち早く気が付いた誰かが誰かに伝達して、そのまた誰かが誰かに伝達して、大勢が駆け付け、水に浮かぶ彼を救いだそうとする。

頭の中ではもう、彼はプールから救出されていた。しかし、目に映る世界では未だ彼はプールに浮かんでいる。彼の肉体から離れたところに黒い首輪が浮かんでいた。その近くには彼が彼自身を失うために扱った小さなナイフも浮かんでいた。

プールサイドに佇む岩佐久兵衛は、緑色の彼を失うまでの記憶に着目する。

*

曲調が変わった。継続されていた爆発的な陽気さが静まり、粘り気のある陰気さが空間を包み込んでいく。動きが止まり、内向性が話しかけてきた。床の絵も壁の絵も、先程捉えた印象から消魂^{けたたま}しい変わりようだ。同じ絵が描かれているはずなのに芽生える心情は雲泥の差。その瞬間、頭の中に漂う幾つもの暗示が同時に重なるうとする。いつどこで誰に教わるか定かではないけれども、芯まで温かいことだけは分かる。まだ靄^もがかかり、その正体は不透明さを保ち続けている。「もう少し先か？」

又、曲調が変わった。再び、爆発的な陽気さが舞い戻る。この間^{かん}、わずか十二秒という時間だった。

吹っ切れたように踊る久兵衛の心は解放されていた。

今まで扱ったことのない動作を繰り返し披露し、身に染み込ませていく。見ず知らずの人間と目配せをし、彼らの陽気さを受け取った。通じない言葉のやり取りを幾つか交わし、肯き合う。すると相手は一段と陽気に踊り狂った。負けじと身体をくねらせ、雄叫びを上げ、上昇する熱量に頼り切って、その場限りの言葉を口にする。この空間に潜む刺激だけを受け取り、身を任せる。大声で叫び、踊り、時には三味線を弾き、両手を上げ、味わったことのない飲料を口にする。言葉にならない想いを抱き、言葉が通じない相手とのやり取りを繰り返し、心が通じた気分^{気分}に陥っていく。誰かが話しかけてきて、誰かに話しかけて、踊り、雄叫びを上げていた。

ふいに、あの十二秒間の粘り気のある陰気さが脳裏を横切った。その一瞬の迷いが、久兵衛の世界観に影響を与えていく。

書物に目を通していた若者がヒマワリに姿を変え、寝具を敷いて眠っていた老人がフクロウに姿を変えていた。二三度、目を擦^{こす}る。

違って見えた。同じ空間にも関わらず、すべてが違って見えた。急激に、疑問が止まらなくなかった。ここはどこだ？ 一体、俺は何者だ？

ウサギとカメラがキャッチボールをしている。青色の肌の人間がチョコレイトに食べられている。チューリップが人間に水をやり、道路が車の上を走っている。黒い火花が打ちあがり、黄色い桜が咲き乱れていた。

首の長いカメラが話しかけてくる。「オマエもボール投げてみないか？」

それどころではない。

軽くあしらわれたと感じたカメラはウサギに向かってボールを投げ返しなう。「どうせ俺は足が遅いのよ」

受け取ったウサギがすぐさま、ボールと共に言葉を返す。「でも、私よりも速いじゃない」

「それは」首の長いカメラが口を開く。「ある側面だけに着目した時の話だろう」

カメラから投げられたボールが、ウサギの手に納まる前に言い放つ。「どうしても決めつけたがるのさ」

空間には、数字や文字が舞っている。音階だって姿を見せている。悲しいも見える。嬉しいも見える。九と悲しいが目配せをし、嬉しいとファが手を取り合っている。おはようが橙色の肌の人間の汗を拭き、寂しいが陽気に踊っている。今まで見えていた景色と、今見えている景色。一体、何が違う？

「何も見えていないのよ」と、耳の短いウサギが言った。「見ようとすらしていない」

無性に、緑色の彼に会いたくなった。彼が醸し出す親近感に触れなくなった。

鳴り響く音楽は変わらない。ネオンの色も変わらない。目に映る彼らの佇まいも変わらない。同じように映っているのにも関わらず、同じではない心持ちが襲い掛かってくる。奇妙な心情が渦を巻いて、ますます大きくなっていく。

一度目を瞑り、記憶にすがりつく。緑色の彼の存在を浮かべ、正気を保とうとする。目に映る彼らの佇まいも変わらない。同じように映っているのにも関わらず……。

耳の短いウサギが言い切った。

「思い込み人間」

ウサギと視線がぶつかる。ドク、ドク、ドク、ドク、ドク。五秒が経過した。嫌な予感を抱き、一刻も早くこの場から立ち去らなければと直感する。けれども、どれだけ意識を費やしても、視線を逸らすことが出来なかった。もがけばもがく程、ウサギの視線に縛られていく。あからさまに、ウサギの口角が上がった。その瞬間を受け入れてしまったと認識した時、強度のある不気味さが紛れ込んできた。ドク、ドク、ドク、ドク、ドク。ウサギの耳が、少しずつ伸びていく。ドク、ドク、ドク、ドク、ドク。ウサギの足音が、一歩ずつ近づいてくる。地面が歪み、空間が捻じ曲がって見えた。すべての印象が、この大いなる不気味さに呑み込まれていく。あからさまに、ウサギの口角が上がった。縛られた視線から縛られた印象が生みだされ、世界観まで縛り上げられていく。

「予感はいくまで予感でしかねえ」

その距離、わずか五センチメートル。目の前のウサギが言葉を放つ。

「同様に、印象もなあ」

そしてウサギは、「べえ」と発しながら千切れそうになるくらいまでゆっくりと舌を伸ばしてみせた。その長さはどこまでも続いていくような気がした。

ドンツ、という衝撃が左肩に加わった。反射的に振り返り、現実世界に舞い戻ったことを知った。ウサギは？ ウサギどころか、カメの姿すら見えなかった。

青色の肌の人間が、チョコレイトを食べていた。こちらの視線に気が付き、手に持つチョコレイトを差し出してきたが首を横に振った。青色の彼は、小刻みに二度肯いてから自らの空間に戻っていった。

書物に目を通す若者や寝具を敷いて眠る老人の姿が目に入り込んでくる。音は音としての役割を果たし、時間は時間としての役割に戻っていた。

誰かがチューリップに水を与えたであろう痕跡があった。その光景を捉えたとき、頭の中で声がする。「とにかく、動いてみる」

その声はどこまでも、耳の短いウサギの声だった。

足を動かし、手を動かし、はやる気持ちを体现する。階段を上り、新しい空間へ移る。そして階段を降り又、新しい空間へ移動する。

ある階層は、水槽と花瓶だけが置かれていた。緻密に考え抜かれたのかは分からないが、数量、配置、色合い、大きさ、光の具合が絶妙な調和を図り、際立った印象を与えてくれた。これを黄金比とでもいうのだろうか？ 音は一切流れていなかった。花瓶に納まる花々は華麗で、水槽に納まる魚たちの動向は計り知れない。その光景に目を奪われる人間たちは皆、恍惚とした表情にならざるを得なかった。

ある階層は、信号機の指示に従って身体を動かす者たちで形成されていた。赤になると立ち止まり、青になると動き出す。黄色になると、余裕がある者は立ち止まり、余裕がない者は動きつづけた。その度に、至る所で小競り合いが繰り広げられることになった。

又ある階層は、ユーロビートのような刻みの速い音が流れているかと思えば一転、民族舞踊のような音に切り替わる。遙かに背丈の小さい人間たちが仮面を被り、大玉に乗って現れた。その場に居合わせた人間たちは拍手で出迎え、胸を高鳴らせている。期待を遙かに上回るような超人離れした技の数々を披露する彼らに喝采が送られた。皆、彼らに夢中だった。

徐々に難易度を上げ、空間の熱量を操り、緊張と緩和の両極を体现する。積み重ねた信頼を手で満を持して最高潮へ向かおうとした矢先、チークタイムを彷彿とさせる刻みの遅い音が、張り詰めた空間に割り込んできた。

今の今まで熱狂していた人間たちは彼らのお披露目そっこのけで流れる音に焦点を当て、色気のある雰囲気魅了されていく。視線を失った彼らは、豆鉄砲を食らったような気分陥った。必然的に隅に追いやられ、意気消沈。軍団を率いる長は、この理不尽で身勝手な大衆の振舞いに憤慨し殺気を漂わせたが、大衆の波には太刀打ちできないことを察して退場を余儀なくされた。場の空気はもう、甘い香り一色だった。

道化師のような人物が隣に現れ、一瞥をくれた。どうしてだろう、何とも言えない心持ちになってその場を後にする。

何段もの階段を上り、何段もの階段を下りた。
何段もの階段を下り、何段もの階段を上った。

自然が生い茂る。今にも動物たちの鳴き声が聞こえてきそうだ。今まで味わった数々の空間とは似ても似つかなかった。どこか野性的で、どこか宇宙的で、人間であることを見失いそうになる空間だった。反射的に、振り返る。音を感じ、光を浴び、空間を味わっている者たちが小さく見えた。踊り、騒ぎ、歌いながら各々の間合いで呼吸をしている。もう一度、前方に目を向ける。ドク、ドク、ドクと、心臓の音が大きく鳴っていることを掴んだ。招かれていた。そして、待ち受けている。そんな想いと共に、恐る恐る足を踏み入れていく。一歩、二歩、三歩……。集中の度合いが桁違いに高まっていくのが分かった。細かく、鋭く、奥深く。普段であれば軽く受け流してしまいうような感覚を、尖った集中力で拾い上げていく。ある一歩を境に数段、気温が低くなった。全身にひややかさを感じ、秘密の扉を開けてしまったかのような心持ちを得ている。

慌てて振り返った。人工的に扱われた音や光に手を伸ばし、足を動かす者たちの熱狂的な姿が映り込む。この、何度も何度も見た光景が待ち受けているだけだった。けれどもその光景は、目に見える以上に遙か遠くにあるようだった。

静寂が、奥へ奥へと手招きしてくる。震えているのは、委縮しているから？ それとも、奮い立っているから？ 凝縮された時の流れを味方につけ、緩やかな速度を持って喧噪が、けんそう過去へと移り変わっていく。

進んだのは、わずか五メートル程だった。しかしその数百倍を超えるやり取りが、緻密に行われていた。聞こえない声が言葉を発し、見えない景色が目の前に浮かぶ。想像上から抜け出した華やかさが節度を持って飾られていく。それはまるでオーケストラの演奏を鑑賞しているかのようだった。反面、普段は見るものが出来ない彼らの血の滲むような裏側が、明確に脳裏を突き刺してくる。表裏一体。華やかに見えるのには、総じて訳がある。

パアツと開けた空間が、迎え入れてくれた。その場に立ち尽くすことを選択する。

風の音が聞こえる。

草木の匂いが鼻の奥へ通う。

目に見える色は物静かで、空間が抱擁してくれているようだった。

ブルーサイド。

漂う水。

奥に、梯子。

その先へ進むと、あいつの姿があった。

緑色の彼の姿を捉えた瞬間、乱れていた感覚が真ん中へ集まってきた。安堵が、芽生える。その安堵は、至って大らかであった。あからさまに、口角を上げた。驚く程、強^{したた}かに上がっていた。緑色の彼に向けて右手を上げる。彼も右手を上げて応えてくれた。そして力強く、三味線を指さした。

過去の記憶が蘇ってくる。あの時と同じように生き活きとした表情を見せてくれた。張り詰めていた意識が遮断され、親しみが肉体の中で再生する。

「そこでなにをしているの？」

緑色の彼に届くように大きな声で伝えた。

「◎&;…#¥;…¥1m」

放つ言葉の意味なんてお構いなしに、想いを伝える。「探し回ったんだ！」

緑色の彼は大きく肯き、白い歯を見せ、もう一度三味線を指さした。

彼の思惑を察し、ひとつ、三味線を鳴らしてみせた。奏でられた音の匂いを嗅ぎ、蕩けるような表情が生みだされる。両手を耳に当て、もっと聞かせてくれよとも言っているような仕草を残す。緑色の彼は瞳を閉じ、聴覚に力を込めていた。

自然が生い茂るこの空間。耳を澄ませているものは、他にも多数存在していた。

そんな彼らの要望に応えるように、一呼吸おいてから三味線を奏で始めた。目を閉じる緑色の彼は、音を耳にした瞬間、脱力する。しばらくしてその音は空間に統合する。

風が吹き、鳥が鳴き、水が揺れ、草木がさんざめく。

奏でる三味線の音色は、この空間にとって唯一足りない欠片だったことを印象付けた。緑色の彼の口角があからさまに上がった。脱力感がより一層、凄みを増す。

耳を澄まし、進んで行く。三味線ひとつで奏でられた音に、自然の音が重ねられていく。風が吹き、鳥が鳴き、水が揺れ、草木がさんざめく。受け手と送り手、周囲との即興が複雑に絡み合い、面白味を引き寄せる。没頭。一体感。愉快。うねり。その場限り……とにかく、ブルーヴァーだった。

時を忘れてしまいそうだ

それでも、時は刻まれていく

目を背けてしまいそうだ

それでも、景色は移ろっていく

自分を見失ってしまいそうだ

それでも、自分であることには変わらない

今にも息が途絶えてしまいそうだがそれでも、新しい生命は産声をあげつつけるのだろう

永い演奏が、終わった。それは、この空間にいる誰しものが待ち望まない瞬間だった。これ以上でもこれ以下でもない絶妙な間合いがやってきて、勘の鋭い面々が一斉に区切りをつけた。寸分の狂いもない鮮やかな仕舞だった。余韻が、穏やかな波を打っている。

「どうだった？」

お立ち台に佇む緑色の彼の表情は穏やかそのものだった。

「降りておいでよ！」

「\$ # % .. ¥ ¥ ¥ .. & &」

緑色の彼は親指を掲げながら言葉を放った。そして、ポケットからナイフを取りだす。二秒という時間を経て、彼は彼自身の手で命を絶った。

*

プールサイドに佇む岩佐久兵衛。緑色の彼の背中に描かれる絵を、長いあいだ見つめていた。

もし彼に親しみを抱いていなければ、こんな心持ちにはなっていなかったはずだ。

親しみが、肉体に漂っている。あの六十秒の間に何が潜んでいた？

ふいに雨の匂いが鼻先を掠めた。

ずぶ濡れになった緑色の彼が指をさす。指先が向けられた場所へ視線を送る。三味線が目映る。三味線から水滴が滴っている。三味線が、濡れている。

現実として起こっていない映像が頭の中に流れていた。動機は？ なぜ彼はこの世を去らなければならなかった？

誰かが颯爽と駆け抜け、プールに飛び込んだ。

「イルカ？」

一瞬の出来事だった。

その人物は緑色の彼の元へ近づき、生死を確かめているようだった。その間、一切表情を変えることがなかった。凜とした佇まいに、直線的な眼差し。髪は短く、肌の色は赤い。黒い首輪とは別に、首飾りのような物を身に付けている。彼女はこちらに視線を送って小刻みに首を横に振った。それから幾つか言葉を並べていたが知っている言葉は一つも見当たらなかった。何も分からないという素振りを表すと、彼女は浮かぶナイフを手に取り、プールから上がった。そしてそのままプールサイドを後にした。

又、雨の匂いがする。

彼女の眼差しには濁りがなかった。一滴たりとも混じっていないかった。

切り裂かれた首輪が、ぽつんとプールに浮かんでいる。

数分後、彼女が戻ってきた。その時初めて彼女の肉体が濡れていることを知った。
風の音が聞こえる。

草木の匂いが鼻の奥へ通う。

二人だけしかないような錯覚を得た。いや、二人だけしかないと思い込みたかった。
少しだけ、イルカの心持ちに近づいた気がした。

彼女の手が静かに伸びてくる。
手と手が触れ合う。

空白の一行が、この世のなかに誕生した。

*

「どう？」

「どうして？」

神聖な空間が、ふたりを包み込んでいた。

「この首輪を付けている者同士は、どんな言語であっても言葉が通じるようになる」彼女は
久兵衛の首元を指さした。「ほら」

「本当だ」

「これが共通言語の役割を果たしている。ここに住む者は、この首輪を付けながら暮らして
いる」

先ほどまでの騒がしさとは打って変わって、のどか長閑さが一面に広がっていた。

空間には彼ら以外の人間は見当たらなかった。

「どうしてあの場所にいた？」と、彼女が言った。

「どうしてだろう」

頭の中には過去の記憶たちが薄っすらと漂い、混ざり合っていた。

気さく、緑色、花瓶、水槽、プール、お立ち台、信号機、ネオン、踊り、表情、ユーロビ
ート、黒い首輪、色気、心臓の音、チークタイム、首飾り、自然、若者、騒がしい、プール
サイド、老人、ナイフ。

それらをまとめて、彼女の問いかけの答えに至るまでには相当な時間を費やすだろうと
考え、言葉として世に表すことを選択しなかった。

「どうして連れ出してくれたの？」

「理由、必要？」と、彼女が返した。

虫の声が、響いている。

その音を左脳で聞いた。

「ここは？」

「私のお気に入りの場所」と、彼女が返した。「本当は誰にも教えたくない」

虫の声が、響いている。

その音に懐かしさを感じていた。

「神の社」と、彼女が言った。「自分に戻れる唯一の場所」

「なんだか分かる気がする」

「あなた、名前は？」

「久兵衛。君は？」

「トト」

一つ息を吞んでから、とても似合っている、と伝えていた。

「あいつのこと知ってたの？」と、トトが言う。

「あいつ？」

「プールに浮かんでいたあいつ」

「知らない。あいつは誰なの？」

「緑色の肌の人間」

「そんなの見たら分かるよ」

「知らないのにどうしてあの場所に立ってた？」

「彼に会いたかったから」

「どうして？」

「そんな気がしたから」

会話が途切れる。どちらも言葉を発さなかった。

「どうしてプールに飛び込んだの？」

「どうしてだとおもう？」と、トトが返した。

「彼がまだ生きているか確認したかったから」

「半分は正解で半分は不正解」

「どっちでもいいけど」

本当は、とても知りたかった。

会話が途切れる。先程よりも長い間、言葉を発さなかった。

虫の音が、響いている。

その音を味わいつづけていると、言葉が洩れていた。「心地がいい」
「どうして？」

「虫の音がたまらなく心地いい」

トトの表情が、あからさまに変わった。

彼女の肉体から毒素が抜ける音がする。

「忘れてた」

そして彼女は、独り言をつぶやくように言った。「ここで暮らしているといつも大事なものを失っている」

鴉が一羽、上空を通り過ぎたように見えた。

「……ありがとう。少し思い出せたかも」

夜空には星が浮かんでいた。辺り一面、暗闇だった。月の明かりが地上を照らす。彼女はひとつ、深い呼吸を見せた。目を閉じ、耳を澄ましているようにも見えた。

二人を取り巻く時の流れは、悠長だった。いくつか言葉を交わし、互いの間合いを埋めていく。しばらくして、彼女は立ち上がる。数歩歩いて、指先から踊り始めた。鳥居、砂利、大木、石像、手水舎。邪さが含まれていない神聖な空間で踊る。つま先、首筋、唇、鼻筋。その舞は、鶴のように見えた。虫の声を背景に踊る。くるくる、ゆらゆら、どろどろ、きらきら。その舞は、太陽のように見えた。聞きたいことが山ほどあるはずなのに、言葉は要らなかった。聞いて欲しいことが山ほどあるはずなのに、言葉は要らなかった。

トトの首元を見つめる。そして、自らの首元に右手を寄せる。いくらだって会話ができればずなのに、言葉は要らなかった。

「\$#“%…¥¥….&&」

あの時、あいつは何を伝えたかったのだろうか。トトの舞を通して、彼との別れについて深く掘り下げている。自然、グルーヴィー、さんざめく、降りておいでよ！ 風が吹く、永い演奏、ポケットからナイフ、面白味、脱力感、親指、気さく、鋭い面々、一呼吸、三味線、黒い首輪……彼は彼自身の手で命を絶った。

お立ち台に立つあいつの姿が、頭の中にやってくる。彼にはこの現実がどう見えていたのだろうか。親指を掲げ、通じない言葉を扱った。彼は終始、笑顔だった。それなのに命を絶った。生と死の境目には一体、何が存在する？ 誰かその答えを知っている者はいるか？

知っているのなら右手をあげてくれないか？

虫の声が脳裏に響き、現実世界に呼び戻してくれた。鳥居、砂利、大木、石像、手水舎。邪さが含まれていない神聖な空間に身を置いていることに触れて安堵する。

足元には枯れ葉や落ち葉が横たわっている。トトは、素足だった。聡明な精神性が垣間見える。彼女にはこの現実がどう見えているのだろうか？

唐突に、トトが言った。「あなたの使命は？」

言葉に詰まってしまふ。

「何を果たしにやって来たの？」

彼女の言葉が耳に突き刺さる。

「誰にだって与えられた役割があるはずよ」

すぐに言葉が出てこなかった。逃げ道を探すように訊ねていた。「トトは？」

彼女は、聞こえないふりをする。

依然、虫の声が背景を彩り、彼女は舞を披露している。鶴にも太陽にも見えるその舞は、心の奥底を震わせてくれた。「こいつを弾きつづけていたい」

咄嗟に出た言葉だった。

「久兵衛は、なにを背負って生きてるの？」言葉と舞を同化させるような動きだった。「綺麗事だけでは何も成り立たない」

指を差すあいつの光景が、浮かび上がってきた。「俺は、三味線が好きなんだ」

「じゃあ、そいつを背負って何かを成し遂げれば？」

彼女の言葉が重くのしかかる。思わず、空を見上げていた。月の明かりから声が聞こえる。「アナタの音、聞きたいな」優しく寄り添ってくれているようだった。

研ぎ澄まされた神経を扱い、彼女の舞と虫の声との調和に挑むことを決意する。トトの舞を捉え、虫の声を捉え、指先に想いを託す。混沌とした感情が、肉体を埋め尽くしていた。言葉にしてしまえば容易いのだろうか、言葉にした瞬間この想いの価値は損なわれるだろう。

その想いを、三味線の音色に乗せたいと思えた。虫の声を耳に、トトの舞を目に焼き付け、この世の中に一石を投じる。奏でる音色が、三味線によって現れた。

遠吠えが天まで達して雨が降る

恵みの雨に草木の歓喜

遠吠えが天まで達して雪が降る

知るも知らぬも雪に白鷺

遠吠えが天まで達して種を蒔く

遠吠えが天まで達して華が散る

浮かぶ音色に合わせて、トトの想いが舞に成る。合わせて、虫たちの想いが声に成る。複雑に絡み合う混沌と混沌が混じり合っていく。言葉にするよりも遙かに伝わり、心が大きく揺さぶられていく。深く、呼吸をする。指先に力を込める。そして、声なき世界に没頭する。

一方は奏で、もう一方は舞う。見つめ合い、心の柔らかいところを共有していく。互いの表情はとても素朴なものだった。虫の声が彼らを包み込み、月の明かりが彼らを彩っている。一歩また一歩と、地道に深く沈んでいく。素朴な表情を導き合い、瞳の奥に眠る想いを交わしていく。噛みしめれば噛みしめる程、一人では生きていけないことが身に染みていく。それは当たり前のように、最も忘れてはいけないことなのかもしれない。

「ようやく出会えた」

静けさに吸い込まれるように、虫の声が消えた。続いて、月の明かりが消えた。暗やみの中、あふれる音がきこえてくる。後は、身をまかせただけだった。

「トト」

「久兵衛」

頭の中には、新たな音が浮かび上がっていた。それは、今まで一度も現れたことのない音だった。ほのかに感じる生命の根源。

トトの言葉が脳裏で響く。

「あなたの使命は？」

ゴーン。

鐘の音が、轟いた。一瞬にして、場面が転換されている。

指先は変わらず、三味線を弾き胡坐をかいていた。しかし、この空間にトトの姿は見当たらなかった。月の明かりもなく、虫の声も聞こえない。代わりに、目の前にはお面を被った人間が座っていた。わずか、三十センチメートル程の距離を挟んで向かい合っている。

「ここは？」

お面を被った人間から言葉が返ってくる。「とてつもなく深いところまできたな」

彼は、三味線のような楽器を身に着けていた。纏う衣服には、些細な乱れすら生じていなかった。密な距離であるにも関わらず、一切の影響を受けることなく存在しているようだった。その間合いは、至って穏やかだった。

「深いところ？　自分が今どこにいるのか……」

「それでいい」

お面の彼が、分厚い心遣いを持って、身に着ける楽器を奏で始めた。

「ここはどこですか？」

「そんなことを気にしてどうする」

穏やかな風が吹き、森林が聳えている。山々が佇み、海底の音が聞こえてくる。青い空に白い雲が浮かぶ。蝶が舞い、陽の光が二人を取り囲んでいた。

「さっきまで神の社にいたような」

「神の社だと思えばここはもう神の社だ」

「虫の声も聞こえていました」

「虫の声が聞こえていると思えば虫の声は聞こえている」

天を、見上げていた。太陽が鋭い輝きを放っている。思わず、言葉を洩らしていた。「トト？」

「夢中になっていると周りを見失う。けれども、夢中にならなければ己を見失う」

ふたりの視線がぶつかった。

「お前は人間か？」と、お面を被る彼が言う。

「人間です」と、答えていた。

「人間は偉いか？」

その時、ぴゅーっと風が吹いた。

「……分かりません」

「答えよ」

「分かりません」

ふたりの視線がぶつかっている。

「答えよ」

「分かりません」

その時、ぴゅーと風が吹いて又、ぴゅーっと風が吹いた。

「答えよ！」

深みのある圧を感じた。二人の指先が停止する。気高きところで交わっていた音色が、過去のものとしてこの世に現れた。そして又、太陽が鋭い輝きを放っていることを掴む。どうしてだろう、海底から音が聞こえてくる。少しだけ、鯨の心持ちに近づいた気がした。

人間は偉いか？

この言葉の意味を考えた。しかし、どれだけ導きだそうとしても答えは変わらなかった。

「分かりません」

「それならば、ついてこい」

ゴーン。

再び、大きな鐘の音が鳴った。

「君の目にはどう映る？」

人間たちが、人間たちの世界だと思い込み、人間たちの欲望のままに息をしている。

強い風が吹き、強い雨が降り、土砂が崩れ落ちていく。

森林がなぎ倒され、悲鳴が飛び交っている。

「……」

言葉を発さなかった。いや、発せなかった。

「耳を澄ましてごらんない。君にはこの悲鳴の姿が見えるはずだ」

お前たちハ俺たちヲ見てくれなかつタ

お前たちノ都合ノ為ニ殺された仲間ガ大勢イル

俺たちハ忠告シタ！ 何度モ忠告シタ！

それでモお前たちハ見てくれなかつタ！

だから俺たちモ見ないと決めタ

信じテいたのニ

悲鳴が、魂を宿し、地に足を着けていく。緑色の肌の人間が、形成されていく。

頭の中には、親指を掲げるあいつの表情が色濃く浮かんでいた。

「あれが、ツエーマフの面々だ」と、お面の彼が言った。

「ツエーマフ？」

「君は、この言葉を耳にしたことがあるだろう」お面の彼の口元が、いつにもまして丁寧に動かされてた。「ないがしろにした報いが災いをもたらし、欲望のままに真心を損なうのであれば緑の群れが反逆を行う」

どうしてだろう、細胞が肯いている。

「折れた翼が死を持って黄色い虫の声に託したとき、すべてが手を取り合うだろう」

息を、呑む。胸が熱く燃え上がる。お面の彼の口元に合わせて、切実に、次の言葉を重ねていく。「さすれば、水の如く蝶が舞う」

お面の彼が、含みのある笑みを浮かべていた。「黄色い虫の声よ、すべてを巻き込む覚悟はあるのか？」

\$ # “ % … ¥ ¥ … & & 、親指を掲げるあいつの肌の色は緑色だった。

「黄色い虫の声？ すべてを巻き込む覚悟？ ツエーマフ？ ちょっと待って下さい。頭が混乱して何が何だか分かりません。俺は、トトと出会って虫の声を聞いて三味線を奏でただけです。気さくなあいつと出会って、あいつがプールに落ちて、血の色が赤くて……」

思い出したように、言葉が零れ落ちていた。「そもそもここはどこですか？」

「疑問を抱くのは素晴らしいことだ。よし、導きはこのくらいにしておこうか。空白がなければ築く力は養われない。後は……」

お面の彼が、穏やかな口調で物語る。「自分の目で確かめてこい」
彼女との記憶が、頭の中で再生されていた。

「あなたの使命は？」

空の向こうでカラスが優しく鳴いていた。



岩佐久兵衛いわさきゆうべえの目が、覚めた。

そこには見たことのない天井がひろがっていた。

*

「あんた、どっから来た？」

「……江戸」

紫色の肌を持つ人間が、口にしていたお菓子を嘔き出してしまった。「それ千年以上も前の日本なんよ。もしかしてタイムスリップでもしてきたんか？」

言葉の音だけが、耳の中を通り抜けていく。

「たまげたな！　どうやったらタイムスリップできるんだか」紫色の彼は驚きながらも、食べているお菓子の袋を差し出してきた。「んで、あんた一体何者よ？」

「人間」小さく頭を下げ、恐る恐る一枚食べてみる。「美味しい」

「当り前だろ！　ポテイトーズチプス期間限定ピンチヨスシー味だよ」

「もう一枚食べてもいい？」

「いくらでも食べたらいいぞ」紫色の彼が、袋ごと渡してきた。そして、床の上に零れ落ちたポテイトーズチプスの残骸を拾っている。「ライスに振り掛けるともっと美味しいぞ」

知らない空間で知らない人間と会話しているのにもかかわらず、心や体が張り詰めていなかった。ポテイトーズチプスを拾っている紫色の彼の寛大な空気感に包まれているのだろうか。

「江戸はどんな場所だ？」

過去の記憶から言葉を選ぼうとする。「え？」

記憶の引き出しが空っぽだった。何かの間違いだと思い込み、もう一度、手繰り寄せようとする。江戸、岩佐久兵衛、三味線……。「あ、俺の三味線は？」

「あそこだよ」

指さす方向に、三味線が置かれていた。隣にもう一つ似たような楽器が立て掛けられている。「あれは？」

「バンジョー」彼は誇らしげに言った。「先祖代々受け継がれているやつさ」

ふたつ並んでいる楽器を目にする。しばらく、時間を忘れて眺めていた。

「ここに来てから誰かと会ったか？」と、紫色の彼が言った。

「赤色の肌の人間」

「それはすぐに出てくるんね」

鶴のように太陽のように舞う彼女の姿が、頭の中に浮かんでいた。けれども、その前後の背景にはまとまりがなく曖昧さが際立っていた。彼女の名前、なんだっけ？

華麗な印象だけが先走りしていく。彼女は、素足だった。聡明な精神性が垣間見える。鶴のように、太陽のように舞っていたことだけは覚えていた。「名前、なんだっけ？」

「俺？ 俺は、ブン・ジョー」右手を差し伸べてきた。「よろしくな」

差し出された右手を反射的に握り返そうとしていた。「いや、そうじゃな……」

「よろしくな！」

力強く握りしめられた。肌と肌が触れ合う。この空間に、自分以外にも実在する感触を得ていた。瞬く間にうねりが突き上げ、目を背けていた現実世界を直視することになってしまった。「俺、タイムスリップしてきたの？」

「お前、タイムスリップしてきたんじゃない？」

今になってようやく、言葉の意味が耳の中を通り抜けていった。『それ千年以上も前の日本なんよ。もしかしてタイムスリップでもしてきたんか？』

思わず早口で訊ねていた。「どうやったら江戸に帰れる？」

「は？」

「今までタイムスリップしてきた人とかいないの？」

「いねえよ」

「どうすればいい？」

「知らんよ」

「教えてくれよ」

「無理言うなよ。てか、そんなに強く握らなくてもいいだろ」

握りしめていた手を急いで離した。見る見るうちに血の気が引いていくのが分かった。

「ちょっと待ってくれよ」

あることないことが頭の中を過り、現実世界が歪んで見えた。気が付いた時には震えが止まらずに、体を屈^{かが}めていた。「タイムスリップ？」

頭の中には、江戸時代の生き様が映し出されなかった。しかしどういうわけか、江戸時代に存在して、岩佐久兵衛という名前を与えられて、三味線を弾いていた記憶だけは残っている。そのわずかな情報が、思考の捻じれに拍車をかけてくる。

どこから手を付けていいのか分からなかった。突破口も見いだせず、新たな手掛かりも与えて貰えない。目の前にいる人間は紫色で、当たり前のように『タイムスリップ』と発している。先程、『赤色の肌の人間』と零していた自分自身の存在が理解できなかった。どうしていつも簡単にこの状況を受け入れていたんだ？

「おい、大丈夫か？」

大丈夫なわけないだろ。

「仕方ねえな」

ブン・ジョーが部屋の隅に位置する戸棚へと向かった。戸棚に手を掛け、ポテイトーヅチプスの袋を取り出した。そして久兵衛の元へ戻り、言葉を掛ける。「ほれ、これ読んでみ」今はそれどころじゃないだろ。

ブン・ジョーの手が背中に触れる。「いいから声に出して読んでみな」

確かな温もりが手のひらから伝わってきた。思わず、読み上げていた。「ポテイトーヅチ
プス、超期間限定、究極・ダブルピンチョスシー味」

「まずはこれでも食って元気だせよ」

嬉しさと哀しさが相まって、衝動が生みだされた。「無理に決まってるだろう！」

ブン・ジョーの手からポテイトーヅチプスの袋が投げ出されて、床の上に転がった。それでも彼の間合いは乱れなかった。「馬鹿言うなよ。超期間限定品ってなかなか手に入らない
んよ」

「俺が今どういう状況か分かって言ってるのか？」

「知らない時代に存在することに直面して戸惑っている。それも圧倒的に」

熱量の落差に落胆せざるを得なかった。「わざわざ言葉にすんなよ」

「起こってしまったことに苛立っても、なかったことにはならんよ」

「苛立ってないよ」

「少なくとも苛立っているようにはみえる」

「だからわざわざ言葉にすんなって」

「じゃあどうするんよ」

「分かるわけないだろ。自分が何者か分からない状況を体験したことあんのかよ」

ひとつ、静寂が生まれた。

「常に感じているよ」転がるポテイトーヅチプスの袋を拾い上げたブン・ジョーが、そのまま腰を下ろした。「まずはこいつを食べたいか食べたくないかじゃねえの？」

馬鹿馬鹿しくて言葉を遮った。「そもそも、なんで驚かないんだよ。タイムスリップしてきたかもしれないんだぞ」

「もしかしたらそういうことが起こるかもしれないと想定してきたから驚く必要がない」

「ふざけるなよ」

「どこまで覚えている？」

「知らねえよ」

ふと窓の外に目をやると、鴉が一羽横切った。偶然とは思えなかったが、記憶と結びつくことはなく、悶々とした感情だけが残されていた。

「まずはこの超期間限定品を食べたいか食べたくないかじゃねえの？」

どうしてだろう、紫色の彼を睨んでいた。それでも彼は柔らかな眼差しを向けてくる。視線が重なったまま三秒という時間が過ぎ去った頃、頭の中にピンチョスシーの風味が浮か
び上がってきた。

ブン・ジョーは、わずかに緩んだ久兵衛の表情を見逃さなかった。「食べてみるか？」
「なんで受け入れるんだよ」

またひとつ、静寂が生まれた。

その間に耐えられずに言葉を口にする。「突き放せよ」

「想ってもないことを口にするとか寂しくなるぞ」

「面倒くせえな」

ブン・ジョーの表情は穏やか一色だった。これまで、何度も何度も感情の起伏に挑んだような顔つきに仕上がっている。自分自身の、自分自身以外の、空間そのものの……。彼はあらゆる心の揺れ動きと相対してきたのだろう。その度に、きちんと傷つき、傷つけ、癒し、癒された。時間を掛けて研ぎ澄まされた感覚には、誰も追いつけない。

「とにかく食べてみろよ。それでも胸糞悪いのがつくようだったら好きにしたらいいさ」ポテイトーズチプスを掲げたブン・ジョーが、言う。「どうする？」

熱した身体が、冷めていく。

「食べるよ」と、呟くように洩らしていた。

「なら美味しく召し上がればいいさ」ブン・ジョーは、久兵衛の背中を二度、トントンと叩いた。「自分が想像しているよりも、現実世界は味方になってくれるってんだ」

ポテイトーズチプス、超期間限定、究極・ダブルピンチョスシー味。「なんでこんな大事ななもん食べさせてくれるんだよ」

「目の前で困っている人間がいたら迷わずダブルピンチョスシーだろ。それ食べ終わったらもう一回ゆっくり話してみようぜ」

*

「あんた、何を連れてきたんだい」と、オコトさんが言った。

「こいつ、ぶっ倒れてたんよ」と、ブン・ジョーが返した。

「そこに寝かせてみな」

「分かった」

ブン・ジョーが、岩佐久兵衛を座敷に寝かせた。

「彼、何か身に着けてんだろ」

「胴は四角い……バンジョーによく似た楽器だ」

「こっちに寄こしてみな」

ブン・ジョーは、オコトさんの目の前に三味線を置いた。オコトさんは指先を使い、三味線に触れる。しばらくしてオコトさんが言った。「ブン、こいつの面倒を見ておやり」

昨夜の記憶を振り返っていたブン・ジョー。物珍しそうに、久兵衛の様子を見つめている。「ぶっ倒れているところを俺が見つけて拾い上げてきたんよ。あんなところで何してたんだ？」

「赤色の肌の人間の舞いを見てた。この首輪は彼女から貰った気がする。後は上手く思い出せない」

超期間限定ポテイトーズチップスを一枚頬張った。即座に、ダブルピンチヨスシーはピンチヨスシーよりも遥かに極上だと思った。その想いを言葉にすることはなかったが、確かにそう感じていた。

「ここはどこ？」

「おれんち」

「そうじゃなくて」

「……ん？ ああ、地下都市と呼ばれてる」

彼との間合いに心地よさを感じていた。「初めからそう言ってくればいいのに」

ブン・ジョーも又、居心地の良さを感じていた。「もう地上では暮らせなくなったから誰かが同じような都市をこの地下に作りあげたらしいんよ」

「誰が？」

「さあ、偉い人？」

「地上はどうなったの？」

「枯れ果てたんじゃないの？」

「行ったことないの？」

「行ける訳ねえだろ」

「どうして？」

「あのなあ」ブン・ジョーの呆れた表情が印象的だった。「どうしてって言われても行けないものは行けないんよ。今まで行った人もいないだろうし、逆にどうやったら行けるのさ」

「俺が知るわけじゃないじゃん。どうやって来たかも分かってないのに……。じゃあなんで地下都市って呼ばれてるの？」

「俺が生まれたときにはもうこの環境が当たり前だったし、みんな地下都市って呼んでるから俺も同じように呼んでる。ところでお前は、なんでタイムスリップしてきた？」

「記憶がないから分からない」

「どこまで記憶があるんだ？」

頭の中を覗き込む。「名前は岩佐久兵衛。三味線が好き。江戸時代に生まれた。赤色の肌の人間の表情が華麗で彼女は素足だった。後、ブン・ジョーはとても温かい」

照れくさそうな表情を浮かべるブン・ジョーは、指の腹で鼻先を擦っていた。「どうやってここに来た？」

虚空を超えて、ふたりの視線が合わさっている。

「だから分からないって」

「じゃあなんで地下都市って呼ばれてると思う？」

「だから分からないって言ってるだろ」

この家の天井を突き抜けていくと、青い空に達する。

彼らが会話している間も、様々な思考が様々な形でこの世に表されている。

「分からないばかりだなあ。まあ、いい。じゃあ、なんでお前は生きていると思う？」

ブン・ジョーの表情は、真剣そのものだった。「どうやって生まれてきたんだろ？ 産まれた時、どんな気持ちだったんだろ？」

地下都市と呼ばれているのに、そこには空があって、太陽が輝いていた。夜になると月が現れて、星が浮かんた。

「こんな事、タイムスリップしてきたお前にじゃないと言えねえよ。あとオコトさんにも言えるけど、他の人間たちに言うとか頭がおかしくなったんじゃないかねえかって言われてお終いだからなあ」

ブン・ジョーの物哀し気な表情が印象的だった。

「なあ、地下都市を案内してやろうか？」

どうしてだろう、心が大きく揺さぶられていた。

*

高い建物が並んでいる。あらゆる音が鳴り、あらゆる色が散りばめられ、狭い空がより一層せわしなさを象徴させていた。

「人が浮いてる」

「不思議か？」と、ブン・ジョーが返す。「これが俺たちの移動手段だ」

赤、橙、黄、緑、青、紫。

あらゆる色合いの人間が、網目状になって浮かんでいた。

「なんで浮いてるの？」

「気流に乗ってるんよ」

浮かぶ人間そのものが、空を狭くしているようだった。

ブン・ジョーが、ポケットからマウスピースを取り出した。そのまま咥えて親指と人差し指を二度トントンと突き合わせてから宙に向かって言葉を吐き出していた。

「なにしてるの？」

「行き先を伝えている。まさか、持っていないよな？」

「持ってるわけないだろ」

「良かった」ブン・ジョーが、一つため息を吐いた。「こいつを咥えて行き先を入力すれば気流に乗ってどこへでも行ける。噂によると、『ジャングルヘッド』って呼ばれてる莫大な情報空間と繋がってるから欲しい情報を瞬時に得ることが出来るんよ。ここの連中はみんな

な、こいつを使いこなして生きてるってわけ。まあ、マウスピースに動かされているとも言えちゃうけどね」

「使わない人もいるの？」

「あそこ見てみ」

ひとりの人間が、姿勢を正して座っていた。目を瞑り、一定の間合いで呼吸をしている。どうしてだろう、喪失感が漂っているようにみえた。

「一日中ああやってるんよ。マウスピースを使わなければ自分の足で移動ができない。だからああやって世間との接点を見失って自らと向き合う選択肢を取らざるを得なくなる」

「どうして彼はマウスピースを使わないの？」

「乗っ取られているように感じるからじゃねえか」

「何を？」

ブン・ジョーは、こめかみの辺りを指さした。「思考だよ。賢い人間ほど世間から距離を置きたがる。それもそれで羨ましいと思うけどな……。まったく、不協和音に踊らされちまってるよ」

ブン・ジョーは、狭い空に浮かぶ人間たちを見つめながら言った。「まるで操り人形だ」

人と人がせわしなく行き交っている地下都市の交通手段。高く真っすぐ浮いたり、低く蛇行しながら沈んだり、前後上下左右、あらゆる方向に流れていく。すれ違う人間の濁流。けれども、視線がぶつかることはなかった。皆、指先を使って何かしらの情報を頼りに物事を進めているようだった。ちらほらと、姿勢を正して座っている人間が気流の外側から小さく視界に入ってくる。

「ぶつからないの？」

「マウスピースに位置情報が組み込まれているから衝突することはない。行き先を入力した時点でそのとき空いている最も効率的な道筋が自動で設定される仕組みになっているんよ。だから考えなくても目的地にたどり着く」

「移動の間、何をしてるの？」

「やらなければならないと勝手に思い込んでいることか、本当にどうでもいいことをしている。稀に、本物の自分は何を望んでいるんだろうって気分になる」ブン・ジョーが、辺りを見渡す。「みんな、何かに追われている表情をしているよな」

「何に」

「妖怪じゃないか？」

頭の中に河童の姿が映し出された。どうしてだろう、その河童が全速力で追い掛けてきた。近づいてくる前に、慌てて想像を拭い払った。「色んな肌の人間がいるのはどうして？」

「オコトさんによるとカモフラージュだって言ってたよ」

「オコトさん？」

「後で会わせてやるから楽しみにしとけや」

緑色の肌の人間とすれ違う。一瞬だけ目が合った。そのまま視線が流れていく。

ブン・ジョーが投げかける。「どうした？」

気が付いた時には空を見上げていた。「なんでも思い通りになるって凄いな」

「逆だな。思い通りにならなかったときの方が凄いな」

「どういふこと？」

「思い通りが当たり前になってくると、一つでも思い通りにならなかったとき、未恐ろしい態度が滲み出る」

「例えるなら？」

「鬼じゃねえか？ 天狗かもしれねえ。どの道、この世のものとは思えねえよ」

想像していた。この世のものとは思えない妖怪の世界。けれども、なんだか繋がっているような気配がした。どうしてだろう、遙か先の自分が右手を振って待っている。

「ダブルピンチヨスシーはどうだった？」と、ブン・ジョーが言った。

「とても美味しかった」

「それは良かった」

高く蛇行しながら浮いたり、低く真つすぐ沈んだり、前後上下左右、あらゆる方向に流れていく。すべてが便利で、はかどって、何不自由なく進んでいった。

「ほら、あそこ見てみ」

瑠璃色の肌の人間が二人並んで座っていた。

「無くても会話できるはずなのに、わざわざ首輪付けてるだろう」

「もしかして双子？」

「違うよ」

後ろから三人目が現れて同じように座った。「三つ子だよ」

「なんで三人とも首輪付けてるの？」

「付けてないと不安で仕方ねえんだろ」

「ブン・ジョーもそう思うの？」

「もちろん思うさ」

「外したいとは思わないの？」

「今更、無理に決まってるだろ。流れには逆らえん。みんな、目まぐるしい情報を背負わされて生きているんよ」

ブン・ジョーは自分自身に言い聞かせているようだった。「分かっているのにやめられないんよ……ていうかよ、こんな消極的な心じゃ身に付くものも付かねえよな。もうすぐ着くからちよっと黙ってこうぜ」

「分かった」

ブン・ジョーの言葉通り、目的地に着くまでしばらく黙っていた。その間、大勢の人間とすれ違ったが、視線がぶつかったのは緑色の肌の人間だけだった。

「先祖の方々、紹介するよ。岩佐久兵衛」

辺り一面、墓石だった。

黄泉よみの尊さが錦を飾る。

大きいものや小さいもの。

整っているところや乱れているところ。

旅立った人間たちが、いつも近くで見守ってくれている。

「ここに来ると繋がっていることを思い直すことができる」

空が妨げられずに空だった。雲の流れがよく見えた。あらゆる形の雲が風に乗って流れている。気流に乗る人間たちの姿が遥か遠くの方に見えて、夜でもないのに星が浮かんでいるようだった。息づかいが聞こえてこない。無関心な表情も見当たらない。高い建物がなく、人工物が限られていた。時間が、止まっているような感覚を得る。

沈黙がある世界だった。

「先祖の方々が存在しなかったら俺たちは生まれてこなかった」

墓石に、水を掛ける。

ひしゃく柄杓を使って丁寧に掛ける。

心を込めて拭く。

話しかける。

この場所に存在しているかのように話しかける。

線香を取りだす。

火をつける。

手に持つチョコレイトを供えてあげる。

「繋がっている有難みを忘れちゃいけない。でも、気が付いたら忘れちゃう。だから定期的に來て初心を忘れないようにしているんだ。さあ、久兵衛も手を合わせてやってくれ」

「分かった」

目を瞑り、両手を合わせた途端、氷山の一角が溶けた。「え？」

「どうした？」

「いや、なんでもない」

ひとつ深く呼吸をして、もう一度、目を瞑る。

こめかみの辺りに、聞き覚えのある鐘の音が轟いた。

臉の裏に浮かぶ一筋の象徴。「どうだ、黄色い虫の声よ」

初めて聞いた声ではなかった。

「やっとなるか？」

無駄のない動きでこちらに向かって右手を振っている。

「よく来た」彼は、お面を被っていた。「巡りあわせは数奇だ」

一瞬にして記憶が蘇った。「……ツエーマフ」

「思い出したか」

「ここは？」

「どこだともう」

「地下都市と呼ばれている場所」

「そう思えばそこは地下都市である」

「ブン・ジョーのご先祖様？」

「そう、ブン・ジョーの先祖だ」

「ツエーマフ、黄色い虫の声、人間は偉いかどうか」

「ツエーマフ、黄色い虫の声、人間は偉いかどうか」

「自分の目で確かめるために地下都市に来た？」

「そう、自分の目で確かめるために地下都市に来た」

「どうすれば江戸に帰れる？」

「どうやって江戸に帰る？」

「同じ言葉を繰り返すなよ。どうすればいい？　なあ、教えてくれよ」

「そんなことよりも、もっと大事なことがあるからよく聞け」お面を被る彼はブン・ジョーが供えたチョコレイトを、時間を掛けて手に取った。「先日、夢に恐竜が出てきてそいつが言ったのさ。心の世界と言葉の世界、どっちが好き？」

瞼の裏に浮かぶお面の彼は、すべてを見透かしているようだった。

「だから言っちゃった。左様なこととはどうでもいい、早うこっちは来て共に踊らぬか？　とな。すると恐竜の奴、ハッとした表情をして、急にかしこまって、宜しくお願いします。と言いおった。なんとも嬉しゅうて夜通し踊り狂ったさ。タンゴ、ワルツ、ブレイクダンス。夜も更けると、我を忘れてコンテンツポラリーに浸ってなあ。奴との時間はまるで夢のようであつた。ふと我に返った頃には、日が昇り始めていて、見つめ合っておった。あからさまに照れくさくなって、一つ肯いて、それぞれの居場所に戻っていった。奴の後ろ姿のそれはそれは大きなこと。さすが恐竜だ、と感じたもんだ……。ところで、黄色い虫の声はどんな夢を見る？」

お面の彼の言葉は、途切れることを知らなかった。「ブンジョーの奴、いつもと違うチョコレイトを供えてくれたか。感心、感心。そういや、まだ名乗っておらんんだ。よし、黄色い虫の声よ、名前を訊ねてくれ」

導かれるように、心のなかで唱えていた。あなたの名前はなんですか？

「マイネームイズ」お面を被る彼は、人差し指と親指で作ったグイサインを高々と掲げながら言った。「ヒゲ・アトラクション」

「ヒゲ・アトラクション？」

「黄色い虫の声よ、重要な記憶がまだまだ奥底に眠っておるぞ」

目を開かされていた。視線の先には墓石が立っている。そこに、ヒゲ・アトラクションの姿は見えなかった。もう一度目を瞑ったが、何も起こらなかった。

岩佐久兵衛が目を瞑っていた五秒という時間の中で繰り広げられた一方的なやり取りが、彼の心持ちをほんのり穏やかにさせた。

この世は、愛だぜ。

隣に視線を向けると、ブン・ジョーはまだ目を瞑っていた。空を見上げる。先程よりも青く、澄んでいた。

もう一度、ブン・ジョーに視線を移し、彼がまだ目を閉じていることを確認する。そして、供えられたチョコレイトに焦点を合わせる。動かされた形跡も齧られた形跡もなかった。けれども、頭の中にはヒゲ・アトラクションとの時間が記憶として残されている。恐竜。タンゴ。ワルツ。心の世界。言葉の世界。照れくさくなって。一つ肯いて。夢……。

思わず、声が漏れていた。「ヒゲ・アトラクション？」

*

「もう一人、会わせたい人がいる」

霊園からの帰り道、太陽を見つめるブン・ジョーが言った。西日が独特の背景を醸し出している。もうすぐ、夜になる。

暗闇を思い浮かべて少し寂しくなった。この寂しさを大事に握りしめてやる。そして、こいつの正体を解き明かそうと意気込んだ瞬間、視界に入り込むネオンサイン。手の中の寂しさが蒸発して向かい合う機会が損なわれてしまった。朝も昼も夜も、目まぐるしく働きつづける地下都市の光景に染まっていく。

繰り返されるこの日々に、振り返る勇氣は残されていなかった。

ところが、渴いていく。

身に染みる渴きを反射的に避けてやる。ヒゲ・アトラクションの樂觀さを思い出して傷口を癒してやった。よくやったぞ、黄色い虫の声！と言われた気がした。

淡い想いのままブン・ジョーに声を掛けた。「今日のチョコレイト、特別だったの？」

「何で知ってんだよ。俺、言っただけ？」

「そんな気がしただけ」

「先祖と久兵衛が初めて会う日だからいつも買わないようなやつ持っていたんよ」

ブン・ジョーは指の腹で鼻先を擦った。「特別感を出したくてな」

「先祖の方々、喜んでいたと思うよ。なに味にしたの？」

「モーニングビュッフェ味に決まってんだろ」

陽の光が沈んでいく。少し休んで又、昇り始めるのだろう。

「着いたぞ。オコトさんは面白いぞ」

赤い提灯が視界に飛び込んでくる。入り口の前には暖簾のれんが吊られていた。

『有楽蝶』
ゆうらくちょう

少し前を歩くブン・ジョーが、慣れた手つきで有楽蝶の扉を開いた。「オコトさん、来たよ」

カウンター席が五つに、座敷が一つ。こぢんまりとしていた。あるべき場所にあるべき形が配置され、これ以上でもこれ以下でもない絶妙な間合いが空間を埋め尽くしていた。

「とりあえずピンチョスシー二つ」カウンター席に座ったブン・ジョーが言う。「後、バイスサワーも二つ欲しいな」

鼠色の肌を持つ彼女は、返事をしなかった。店内には三人以外誰もいなかった。

「超期間限定ダブルピンチョスシー味が当たったんよ。二人で一緒に食べたよな」

小さな声で、うん。と答えた。

「オコトさん、久兵衛」

彼女からの返答はなかった。

「久兵衛連れて来たよ」

「分かつとる」

鼠色の彼女の言葉は暖かくて重かった。「バイスサワーはブン、あんたが用意しな」

オコトさんの言葉におどけた表情を浮かべたブン・ジョーは、とても嬉しそうだった。すぐさま立ち上がり、慣れた手つきでグラスを手にとって氷を入れて焼酎を注ぐ。桃色の液体が入った瓶を二つ手に取り、カウンター席まで持ってくる。「久兵衛は酒、飲めるんだっけ？」

「たぶん」

「じゃあ乾杯」

グラスとグラスが合わさる音がこの世に誕生する。

一口飲んだブン・ジョーが心を込めて言った。「ここが俺の癒し処なんよ」

ブン・ジョーは、饒舌になった。幼い子供のように無邪気な言葉を扱った。受け入れて貰えるという安心感が芽生えているのだろうか。一回りも二回りも放つ言葉の量が増えて、内容も幅を利かせて秘める想いを留めることなく露わにしていく。

聞いているのかいないのか。オコトさんは、言葉を返すことなく淡々と作業に取り掛かっていた。ブン・ジョーよりも遥かに高齢で小柄だ。何度か視線がぶつかったが、交流が始ま

るわけではなかった。

「昼間は俺の先祖に会いに行ったんよな。俺のマウスピースを使ってさ、久兵衛背負って氣流に乗ったよな。あんなことしたの初めてだよ」

うん。と、肯いた。

「今日家に帰ったらセッションするんだよな。俺のバンジョーと久兵衛の三味線。これから毎日楽しみだよな」

話半分で聞いていた。オコトさんの動きから目が離せなかったから。独特の間合いに魅せられて凝り固まった窮屈さが手放されていく。

「こら、無遠慮に見てんじゃないよ」オコトさんの言葉が鮮明に、耳に届いた。「目が見えるだけでも有難いと思いな」

「オコトさんは目が見えないんだ」

「おい」と、オコトさんが言う。「ちょっと顔を前に出してみな」

オコトさんの手招きに吸い寄せられるように体を動かしていた。頬にオコトさんの両手が触れる。

「どんな顔しているんだい」

冷たくもなく、温かくもなく、包み込まれているようだった。

彼女は指先を使って触れていく。

額、耳、目、鼻、口、頬、顎。

時間を掛けて触れていく。

なんだか、心の奥底を覗かれているような感覚に陥った。

「嫌いなもんはあるか？」

「鰻が苦手」

放った言葉を自分の耳で聞いた後、鰻が苦手であることを知った。

「オコトさんの手料理はやっぱうめえな」と、ブン・ジョーが言った。

「当り前のこと言うんじゃないよ」

オコトさんの両手が離れていく。

「違うんよ。この味はオコトさんにしか作れない。たとえ同じ手順で同じ調味料を入れたとしても全く違うものができあがるんよ」

ピンチョスシーを頬張るブン・ジョーから安らぎが伝わってきた。

オコトさんが、首輪に触れる。「何も難しいことはしとらん。惑わされていないだけで」コロツケ、刺身、天ぶら、サラダ、おにぎり、味噌汁、漬物。すべてオコトさんが振舞ってくれた。どの料理も美味しかった。その中でも特におにぎりが絶品だった。一口食べた瞬間、衝撃を覚えた。中身は、何も入っていないのに極上だった。視線をあげると、鼠色の彼女が微笑んでいるように見えた。

お手洗いやから戻るとき、訊ねられた。

「この場所に何を感じる」

珈琲を淹れているオコトさんが目に映った。立ち上る湯気に目を凝らし、カウンター席に座り直した。

「江戸から来たんだって？」

ブン・ジョーに視線を移す。得意げな表情を浮かべて三杯目のバイスサワーに手を伸ばすところだった。

「江戸から来た。よく覚えてないけど」

「そうか、江戸から来たんか」

「行ったことあるの？」

「あるわけないだろうが」

一羽の鴉が、有楽蝶の外を、横切った。

「江戸を知ってるの？」

「物事を明確に伝えるには準備が必要だ。あんたのその問いに軽はずみな言葉は届けられない」

ブン・ジョーが、指先を使っている。「マウスピースによれば、江戸は……」

「そんな情報あてにならない」

「またそれかよ。せっかく調べたのに」

ひとつ、想像させられた。「俺は、本当に江戸から来たのかな？」

「じゃあどうして江戸から来たって言ったんよ」

頭の中が渦を巻く。どうして江戸？ どうして岩佐久兵衛？ どうして三味線？ 記憶だけが手がかりなのにその記憶が惑わせてくる。紫色のブン・ジョー。鼠色のオコトさん。緑色のツェーマフ。赤色の肌の人間。お面を被ったヒゲ・アトラクション。瑠璃色の肌の三つ子。黄色い虫の声よ、という言葉が脳裏に響く。なにがなんだかよく分からなかった。「ここはどこだっけ？」

「有楽蝶に決まってるだろ」と、ブン・ジョーが返した。

「そうじゃなくて、地下都市ってなに？ 江戸ってなに？」

ブン・ジョーは、マウスピースを使っていくつもの情報を素早く取り込んでいく。手を伸ばせばすぐに手に入る瞬間的な答え合わせ。「江戸は千年以上前の日本の……」

「何べん言ったら分かる。そんな情報あてにならない」

口に含んだ珈琲を、時間を掛けて味わうオコトさん。彼女の間合いは彼女の間合いだった。「江戸にしようが、地下都市にしようが、生きていることに変わりはないだろ」

オコトさんは久兵衛に関心を抱いているようだった。「人は、どうして生まれてくる？」

天から陽が射し、空から雨が降る

空気の流れが風になり、火の出所に煙が立つ

海が広がり、山が聳える

土があり、草があり、木がある

砂が舞い、雲が舞う

月が浮かび、星が流れる

人は、どうして生まれてくる？

「そんなの、分からないよ」

「そうだ」と、オコトさんが言う。「この世には分からないことがごまんとある。その分からないことを分かろうとするよりも、今できることを考えてみたらどうだ？」

自分の目で確かめてこい。

「昔はこの目も見えていた。どうして光を失ったとおもう？」

「失明に至る原因は全部で五つあるらしい。網膜の異常……」

シッ。と、短く息を吐くオコトさん。「長い間考えているが今も理由は分からない。けれども失った事実は残りつづけている。光を失って初めて光の正体が分かった。それまでは分かった気になっていただけで一つも分かっていたいなかった」

「どんなことが分かった？」

ブン・ジョーの問いに、ふと我に返ったオコトさんの声色が変わった。「こんなことまで話させおって」

黄色い虫の声よ、すべてを巻き込む覚悟はあるのか？

「ありがとう、オコトさん。話してくれて嬉しいよ」

オコトさんは一瞬、驚いた表情を浮かべたがすぐに平然とした表情に戻っていた。「うるさいよ、ばかやろう」

「なんか分かんねえけど、俺もありがとうって思ってたところなんよ」

バイスサワーに手を伸ばすブン・ジョーの頬が、真っ赤に染まっていた。

*

すっかり冷めてしまったミルク珈琲に手を伸ばす。昨日の有楽蝶での出来事を、時間を掛けて振り返っていた。ふとデジタル時計に目を移すと、時刻は十一時十一分を指していた。

「なあ。昨日オコトさんが言ってたけど、黄色い虫の声ってなんだ？」

「ブン・ジョーはこの言葉知ってる？」適切な沈黙を経てから言葉にする。「ないがしろに

した報いが災いをもたらし、欲望のままに真心を損なうのであれば緑の群れが反逆を行う。折れた翼が死を持って黄色い虫の声に託したとき、すべてが手を取り合うだろう。さすれば、水の如く蝶が舞う」

「知らねえ。何それ？」

「分からない」

「分からないのに知ってるのかよ」

「大切なことが頭の中からごっそり抜け落ちていく感覚がするんだ」

「そりゃ記憶がねえからな」ブン・ジョーは隣の部屋に向かった。すぐに、マウスピースを咥えながら戻ってきた。「で、何だっけ？」

「ないがしろにした報いが災いをもたらし、欲望のままに真心を損なうのであれば緑の群れが反逆を行う。折れた翼が死を持って黄色い虫の声に託したとき、すべてが手を取り合うだろう。さすれば、水の如く蝶が舞う」

少しの間、沈黙が生まれた。指先を動かし、眉間にしわを寄せたブン・ジョーが口を開いた。「なんにも出てこねえよ」

*

へーい！ みんな、調子はどうだい？ 毎度おなじみ、ヒゲ・アトラクションさ！ え？
なに？ キャラクターが違うじゃないかって？

そんな細かいことは置いといて、この物語をどう感じてくれている？

楽しい？ つまらない？ 面白い？ たいくつ？ 何が言いたいかわからない？

私は何が言いたいかわかるわ。僕は意味を考えながら読むのが好き。俺はなんとなく読むのが好き。分かりやすい方がどんどん入り込めるから良い。分かりづらい方が自分の頭で考えられるから良い。もつとこうした方がよくなりそうだけどね。もつとあしたの方が全体的にまとまりそうだけどね。技術が足りねえ。いや、技術よりも情熱が大切だろう！ ちょっと、うんちがしたくなってきた！ 漏れちゃうよ！

賛否両論。みんな、いろいろと思うところがあるでしょう？ グレイト、グレイト、スーパーサンクスでありますよ。だつてさ、正直さ、なんだっていいんだもんよ！ 面白くても、つまらなくても、念入りに読んでも、飛ばして読んでも、齒に青のりが付いていても、何かを感じてくれてありがとうなんです。ごさいます。

限られた時間を使って、ここまで読んでくれているということが有難いんだ。そして、素晴らしいことなんだ。とつてもありがたい。正解なんてないから読みたいように読んでください！

森羅万象。花鳥風月。この世はよ、諸行無常。いつでもどんときでも止まることがない。目には見えないけれど常に変化しているんだ。昨日と今日がまったく同じ想いになることなんてありえない。昨日はとてもハッピーだったけど今日はなんだかブルーな気持ち。昼間

はとても開放的だったけど真夜中はなんだかセンチメンタルな気持ち。違って当然。変わって当然。味覚が変わるように、好きなタイプが変わるようにできているのが世の中なのさ！ 春夏秋冬。喜怒哀楽。老若男女。古今東西。違って当然。変わって当然。焦らず騒がず惑わされず。きにしない、きにしない。ほら、声に出して言ってみて！

きにしない、きにしない。たいしたことじゃない！ って、けっこう自分もさ、よく分かんなくなつた時に言い聞かせてやるんだ。

一日が慌ただしく移ろっていくこの世の中、常に何かに追われながら過ぎていく。感じたはずの記憶が根こそぎ抜け落ちていくことも多いんじゃない？ 昨日何食べたっけ？ どんな味だったっけ？ どんな気持ちになったっけ？ 時々、何が何だかよく分からなくなつて我を忘れてしまう人間もいるかもしれない。でもね、そのうちあるべきところにおさまつて、心がすーっと落ち着いていくからもう少しだけ辛抱しながら一緒に踏ん張ろうぜ。

一人で背負い込もうなんて思わないでよ？ 疲れたときは疲れたんだ。許せないときは許せないんだ。助けて欲しいときは助けて欲しいんだ。頼りたいときは頼らなければならんだ。

色々と、背負っていることがあるでしょう？ できることならこのヒゲ・アトラクションが代わつてあげたいところではあるが、残念ながらこれは君の人生なのだ。

じぶんが主人公であることを忘れちゃいけない。色々と考えてしまうことはあるだろうけど、まずは、自分自身がどうしたいのか、どうなりたいのか……。思い描く景色は素敵なはずだよ！ 心の声は、何て言ってる？

あ、そういや！ いま思い出したんだけどよ、この前さ、夢に魔女が出て来たんだよ。でさ、そいつが言うんだ。あなたの願いを一つだけ叶えてあげましょう。だから声を大にして言つてやったよ。

「もう何も叶えられねえよ」って。

驚く魔女に追い打ちを掛けるように言つてやったよ。

「だって、もう生きていない。とっくの昔に死んじゃったから」って……。

死んだら何も残らないんだ。生きているうちだけだぜ、願いが叶えられるのは。だからよ、食べられるうちに食べたいもん食べて、会えるうちに会いたい人に会って、謝れるうちに謝つて、喧嘩できるうちに喧嘩して、泣きわめけるうちに泣きわめいて、苛々できるうちに苛々して、叫べるうちに叫んどけよ！

死んだら何も感じない。思い描くことしかできねえ。だから、生きてるうちに感じられるだけ感じてくれよ！ やりたいことやるんだぞ！

今、心の声は何て言ってる？

この瞬間だけでもいいから、ちゃあんと自分の想いに耳を澄ませてやつてくれわいな。



「今日は凄い日になるぞ!」と、ブン・ジョーが言った。「ようやく当たったんよ」
「何が?」

「リリー・ハレルヤのライブ!」ブン・ジョーの背中から陽気な心持ちが伝わってくる。「これはホントに凄いことなんだぞ」

嬉しそうなブン・ジョーの姿を見ると、なんだか自分まで嬉しくなっていることに気が付いた。苦楽を共にした時間の長さが、そう思わせてくれるのだろうか。

地下都市に降り立ってから百回眠った。季節がひとつ移ろった。知らないことを体で覚えていく。慣れ始めると外からの刺激が薄まった。真新しい情報が限られたことで思考が整い始めたのだろう。地下都市での時間が暮らしになろうとしていた。

紫色のブン・ジョー。三味線とバンジョー。毎日、音を合わせて心を重ねた。嬉しかったこと。悲しかったこと。楽しかったこと。寂しかったこと。苛々したこと……。分かち合った分だけ、彼との間柄が親密になっていく。

人間は偉いか? いくつかのヒゲ・アトラクションの声が頭の中にやってくる。あれ以来、霊園に行つて手を合わせても、彼が現れることはなかった。

物事を明確に伝えるには準備が必要だ。あんたのその問いに軽はずみな言葉は届けられない。いつかのオコトさんの声が頭の中にやってくる。あれから、オコトさんは江戸について一度も語らなかつた。何度訊ねても、答えてはくれなかつた。

赤色の肌の人間の名前は分からないままで、緑色のツエーマフたちとはよく目が合うがそれ以上の進展は望めないままで、江戸に帰る手掛かりも掴めないままだった。

自分の目で確かめてみると言われたものの、何を確かめればいいのか分からなかつた。

「俺たちの歌姫に惚れるんじゃないぞ」目を輝かせたブン・ジョーが言った。「歌つてよし、踊つてよし、身なりも美しくてたまらねえ。今から行く場所は選ばれた者だけが立てる特別な舞台なんだ。その中でもリリーは別格中の別格。彼女のライブは地下都市の全員が見たいと思つている。彼女のライブを見るためだけにわざわざマウスピースを作つて会場に向かう人間もいるみたいだぜ」

ブン・ジョーは頭を掻きむしり、喜びを表現する。「念願だよ。ようやくリリーのライブが生で見れる。生まれて初めて当選したよ」

「そんなに当たらないの?」

「当たらないに決まつてるだろ! いつも配信用のカメラにマウスピースを接続して見てたんよ。久兵衛、お前はホントにラッキーな奴だよ」

リリー・ハレルヤのライブへ向かう道中、ブン・ジョーが熱心に指先を動かしていた。その光景はどこか焦点が定まっていないうように見えた。気流に乗っている時、ブン・ジョーはよくこの表情をしている。

思い切って訊ねてみた。「何してるの？」

返事がなかった。もう少し大きな声で訊ねてみる。「何してるの」

「ん、どうした？」

「いや、何してるのかなと思って」

「都市の様子を見てるんよ」

「都市の様子？」

「あそのカメラで」

指さす方向に目を向ける。一定の間隔で配置されている黒い物体が視界に飛び込んできた。目を凝らすと、白い文字で数字が書かれていた。「百八番。あれのこと？」

「そうそう、あれあれ」と、ブン・ジョーが言う。「連動させたいカメラとマウスピースを接続するとカメラに映っている景色が見られるんよ。そうすりゃ自分の目のように扱えるだろ」

どうしてだろう、顔を歪めていた。「自分の目で見ていような感じなの？」

「たまにその場にいると思ひ込んでしまうくらい臨場感があるぞ。まあ、初めはなんだか気が乗らなかつたけどよ。使わないと置いてかれるし、使ってみれば慣れるもんよ。ほら、周りもみんな使ってるだろ」

同じような表情をしている人間たちが、憑りつかれたように指先を扱っていた。

「足を運んで自分の目で見るより、カメラを通してほうが手っ取り早いんよ」ブン・ジョーが得意げに言う。「しかも、見たいときにすぐ見れるから安心するんよな」

目が見えているのに、目が見えていないようだ。いつかのオコトさんの声が頭の中にやってくる。『目が見えるだけでも有難いと思ひな』

「確かに。言われてみればカメラが沢山ある」

今まで気が付かなかつた。

「外だけじゃねえぞ。空間の中にもあるんよ。学校とか、銀行とか、バーガーショップとか、スーパーマーケットとか、色んなところにあるんよ。先に状況を見ておけば色々分かるから無駄がなくていいだろ」

ひとつの疑念が浮かぶ。「まさか、ブン・ジョーの家にはないよね？」

「まさか……」と、甲高い声上がる。「あるわけないだろ。でも、付けてる人間もいるはずだぜ。職場とか家族とか仲間とか恋人同士でカメラのパスワードを共有していつでもどこでもそばにいられるようにしてるんじゃないかね？　まあ、俺には関係のない話だけどな」どうしてだろう、霊園の空を眺めたくなつた。ヒゲ・アトラクシヨンの言葉に耳を傾けたくなつた。少しづつ、地下都市の日常が身体の奥底にまで染み渡っていく。

悶々とする心持ちに抗うように口元を動かしていた。「カメラは……」

「カメラは自分の目じゃねえ。だろ？　言いたいことは分かつてる。久兵衛は俺が背負って導いてやるから安心しろ」

そういうことじゃないんだけどな、と思つた。悶々とする心持ちは消えることなく、新た

に様々な想いが浮かんできたが、これ以上口にするのは止めた。だって、念願のリリー・ハレルヤのライブがもうすぐそこに迫っていたから。

*

リリー・ハレルヤが歌っている。衝撃で、思考が停止していた。
「おい、久兵衛……。どうした？」

視界の半分以上が空で埋め尽くされ、雲が優雅に流れている。風が穏やかに吹き、このライブを温かく見守っている。リリー・ハレルヤの頭上には、太陽がひかり輝いていた。赤、橙、黄、緑、青、紫。背丈も身なりも何もかもが異なる人間たちが、リリー・ハレルヤの一挙手一投足に視線を集めていた。

注目を浴びる彼女は、彼女の世界観を溢れんばかりに披露する。舞台の真ん中に立ち、満開の輝きを与えている。それに応じて、右手を上げる者。飛び上がる者。雄叫びを上げる者。血流が上がる者。様々な上がり方を証明するオーディエンス。群がり、集まり、人だかりを作っている。今この瞬間、頭で考えている人間は一人もないだろう。リリー・ハレルヤに身を委ね、日頃の苦悩から足を洗う。彼女の舞に目を凝らし、彼女の歌声に耳を澄まし、彼女の姿に勇気を貰う。まるで日光浴をしているような心持ちが、色鮮やかな人間たちに憑依していた。

最後尾には、一段と大きなカメラが鎮座している。配信用のカメラだ。このライブに足を運べなかった者たちが自分の目で見ていると錯覚できるように、この熱量が伝わるように、この勇気を少しでも分け与えられるように、という願いが込められている。

「今日は来てくれてありがとう！」と、リリー・ハレルヤが言った。「この場所に来ることができなかった人もカメラ越しではあるけど、どうぞ楽しんでいてください。この時間を通して少しでも元氣になってまた明日から頑張ろうって思っただけで貰えたらとっても嬉しい！だから最後の最後まで楽しんでいてね。一緒に、最高の空間を作りましょう！」

大きな歓声があがった。その歓声が合図となり、演奏が始まる。ギター、ベース、ドラム、パイプオルガン、チェロ、フルート、バイオリン。その他にもさまざまな楽器がこの舞台の至る所に配置されていた。ジャズ、ロック、ガムラン、エレクトロニカ、クラシック。必要などきに必要な楽器が奏でられ、彼女の背中に手を添える。想いを背負った彼女は、歌声と舞によって解放され、皆の想いを露わにする。

歓声が、鳴りやまなかった。さまざまな魂が昇天する。この空間を待ち望んだ人間たちが、リリー・ハレルヤの佇まいに惚れ惚れしていた。

鳥居、つま先、自分に戻れる唯一の場所、心地がいい、ゆらゆら、神聖な空間、砂利、声なき世界、混沌とした感情、左脳で聞いた、三味線、虫の声、私のお気に入りの場所、長閑さ、石像、手水舎、本当は誰にも教えたくない、どろどろ、二人を取り巻く時の流れは悠長だった、彼女の肉体から毒素が抜ける音がする、首飾り、月明かり……。

隠れていた記憶が一斉に、頭の中に映し出されていた。あなたの使命は？

「おい、久兵衛……。どうしたんだよ」

停止していた思考がふたたび、動き始めた。

「トトだ」

その舞は、鶴のように見えた。その舞は、太陽のように見えた。肉体が、沸騰する。赤色の肌の人間から貫った首輪に右手を寄せている。

頭の中の霧が晴れ、過去と今が繋がった。

「神の社だ」

あの瞬間、確かに生きていた。匂いや風味や肌触り、細やかな音色や景色が当時の感覚と結びつき、残り香のように染みついていた。

「ブン・ジョー！ 江戸に戻るかもしれない！」

「何言ってるんだ！ せっかくリリーのライブに来てんだから今は江戸なんて忘れて感ぜろ！」

この空間を包み込む壮大な熱量が一体感を生みだし、エネルギーとして還元されていた。辺りを見渡す。すべての人が、ひとつの象徴に目を奪われていた。

凜とした佇まいに、直線的な眼差し。髪は短く、肌の色は赤い。首輪とは別に、首飾りのような物を身に付けている。間違いなく、トトだった。しかし、彼女は素足ではなかった。代わりに、イカしたスニーカーを履いている。

それは、

どんな色？

それは、

どんな形？

足元が、勝手に動き始めていた。

「久兵衛、どこ行くんよ！」

「トトに会いに行く」

「おい、戻ってこい！ はぐれたら一人じゃ帰れねえだろ！」

気が付いた時には乱雑に人混みをかき分け、前へ前へと進んでいた。

死んだらどこへゆく

道端に咲く一輪の花はその生き方を知っている

なぜ感じる なぜ考える

枯れ落ちた葉は過去に戻りたいなんて思わない

なぜ傷つく なぜ癒やす

あの星の行く末も知らないのに

あの星の名前は知っている
なぜ生きる 死んだらどこへゆく

導かれるように迷い込んだこの場所で自分自身を認知していた。あれ、俺は何をしているんだ？

宙に浮かび、地上二三メートルの場所から見下ろしていた。蔓つるのようなもので手足を縛られ、張りつけにされていることを知った。背中をむける二人の姿が視界に飛び込んでくる。ここはステージの裏側か？ どうして張りつけにされている？

自分がどこにいるのか掴めていなかった。一心不乱に突き進み、気が付いたときには『アンコール』の大合唱が遠くの方で鳴っていた。必死に、思い返そうとする。

その思考を遮るように、背中をむける二人の声が聞こえてきた。

ザンバラ…「目標のエネルギー値に達したか？」

スカンク…「本日はすでに溜まっています」

ザンバラ…「やはり、リリーは期待を裏切らない」

スカンク…「彼女はリリー・ハレルヤ史上最高傑作ですよ」

ザンバラ…「お陰で随分と早まりそうだ」

彼らは何かの情報を共有しているようだった。声色の圧力。言葉の意味。二人の関係性。それらが今いる環境と相まって、生きた心地がしなかった。

スカンク…「この調子だと、季節が一周もすれば溜まりきりそうですね」

ザンバラ…「長い道のりだった。これで我々と哀れな人間どもの立場がひっくり返る」

張りつけにされているのに、勝手に口が開いていた。「何がひっくり返るんだよ」

背中を向ける二人が同時に振り返った。「ああ、気が付いたか。ザンバラさん、もう一度気絶させますか？」

「そのまま放っておけ」

ザンバラと呼ばれる人間の肌は緑色だった。見るからに大柄で両耳にピアスのようなものを身に着けている。「大人しく黙っていればいいものの」

「分かりました」

スカンクと呼ばれる人間の肌は橙色だった。見るからに小柄で秀逸そうな眼鏡を身に着けている。

二人のバランスは絶妙だった。時間を掛けて信頼関係を築いたのだろう。間合いが、合致している。彼らは無関心な態度を持って背中を向けた。いない者として扱われている疎外感が肉体から生みだされている。

居ても経っても居られなかった。「おい、説明しろよ。何がひっくり返るんだよ」

今度はスカンクだけが振り向いた。「衝動に駆られて自分の感情も制御できない人間に教

えたところで何も残らない。自分がどうして張りつけにされているのかも分かっていないのだろう。欲深い風体でリリーの名前を連呼していたお前を気絶させるのは容易かった」アンコールの音が、ひと際大きく耳に届いた。

「舞台上のリリー・ハレルヤでは満たされなかったのか？ 頼めば直接会えるとも思っただのか？ お前みたいに自分だけは特別だと思っている人間が多すぎるんだよ。だからこの世は乱れてしまったんだ。本当に、虫唾^{むしず}が走る」

「スカンク、やめておけ。何を言っても無駄だ」
どうしてだろう、胸が痛かった。

「ザンバラさん、早くエネルギーを使いましょう」
「それも悪くない。自然の摂理から逸脱した人間どもが、この世に不自然さをもたらした。その不自然さを、エネルギーを使って元の姿に戻し、ふたたび、自然の摂理に身を任せられたのなら、もう誰も哀しむことはない。すべてが循環するだろう……だが、わたしは今とてつもなく気分が良い。だから、あえて情けをかけてやろうと思っている」

どこからともなく鴉が現れて、ザンバラの右肩に止まった。
その音は、異様なまでに静かだった。

「人間どもには、我々の方法で自然の摂理の一部に戻ってもらう」
ザンバラの声が耳の中を通り抜けていく。

その声は、春風のような穏やかさを帯びていた。

「意味わかんないことばかり言うなよ」

「それはお前が理解していいだけだ。理解しようとすらしらない。いつから人間は寄り添うことを忘れてしまった？」

どうしてだろう、目を背けたくなるほど胸が痛かった。

「この世は人間の所有物ではない」

人間たちが、人間たちの世界だと思い込み、人間たちの欲望のままに息をしている。

強い風が吹き、強い雨が降り、土砂が崩れ落ちていく。

森林がなぎ倒され、悲鳴が飛び交っている。

ザンバラと目が合った。鋭いけれど哀しそうな瞳。

彼と、同じ目を知っていた。「……ツエーマフ」

その言葉にスカンクが反応する。「今なんて言った？」

「緑色の肌の人間はツエーマフなんだろ」

お前たちハ俺たちヲ見てくれなかつタ

お前たちノ都合ノ為ニ殺された仲間が大勢イル

俺たちハ忠告シタ！ 何度モ忠告シタ！

それでモお前たちハ見てくれなかった！
だから俺たちモ見ないと決めタ
信じテいたのニ

「ツエーマフが一体、何者か知っているのか？」
アーアーアー。

鴉の聲が耳の中で轟いた。目の前の鴉は、くちばし嘴を開いていなかった。
記憶の奥底が、ぎゅうっと締め付けられていく。反射的に目を瞑り、その鈍い痛みが通り過ぎるのを耐え忍ぼうとする。

「……」
記憶と現実が、頭の中で交錯していた。瞼の裏では、気さくな誰かが親指を掲げて笑っている。

黄色い虫の声よ、重要な記憶がまだまだ奥底に眠っておるぞ。

「なあんだ、答えられないのか」

ザンバラの右肩に止まる鴉が、上空へ向けて飛び去った。

「知っていると思ひ込んでいる状態が最も醜い。みにくどうせマウスピースに転がっている無秩序な情報を片っ端から拾っているのだろう。その中でたまたま取り入れた情報を口にして
いるだけ」

「人間らしい」と、スカンクが言った。

どうにかして記憶に流れる情景を伝えたかった。「悲鳴が魂を宿して人間に姿を変えたんだろ」

「抽象的な言葉を並べればそれらしくなると思うな」

鈍い痛みと共に、気さくな誰かの姿も消えていった。

「これが、報いだ」

再び鴉が現れて、今度は久兵衛の右肩に止まった。

その光景を見つめるザンバラの気配が少しだけ変わった。

どうしてだろう、手足に纏わりつく蔓つるのようなものに温もりを感じる。

誰かに、言わされているようだった。「ツエーマフと人間が手を取り合うことはできないのか」

鴉が、みじかく鳴いた。

「真心を失った人間どもに用はない」

「まだ失っていない人間もいる」

「お願いだからこれ以上、哀しませないでくれ」
そこで大きな歓声があがった。

「アンコールありがとう！」リリー・ハレルヤの声が聞こえてくる。「みんなの声、届いてるよ！」

さらに大きな歓声があがった。

「楽しかった？ あっという間だった？ 私はとても楽しかった！ みんなのお陰でとても晴れやかな気分になったよ。本当に、いつもありがとう！」

リリー・ハレルヤの声が聞こえてくる。その姿を、一目でいいから眺めたかった。目を瞑り、彼女の姿を瞼の裏に思い描こうとする。

「まいにち色んなことがあって、上手くいかない日が続くこともあるけど、その経験は必ず未来のじぶんを助けてくれるから大丈夫！ 諦めずに一緒に頑張ろう！ 私も頑張るから！」

神秘的な感覚が宿り、この世が誕生する前の風景が頭の中に流れていた。それはとても抽象的で具体的な色彩を持つまでには至らなかった。

又、誰かに言わされているようだった。「俺が何とかする」

その時、ぴゅーっと風が吹いた。

「それじゃあ最後の曲、歌うね！」

希望と絶望の境目で、彼女の歌声を耳にする。

哀しみの向こう側

そこになにがあるの

込み上げる想いはさ

なに色に染まるの

群青の雨も

韓紅の朝も

鉛白の時間も

江戸紫の真心も

哀しみの向こう側

そこになにがあるの

「ありがとう！ また会おうね！」

演奏が、終わった。

彼女の歌声に呼応して、鴉が優しく鳴いていた。

*

「なんでこんなところで寝転んでるんよ」

辺り一面、暗闇だった。空には月が浮かんでいた。

「ここは？」

「ライブ会場の隅っこ。今まで何してたんよ」

「……神の社に行かないと」

「は？」

「このままじゃ地下都市に住む人間が操り人形になってしまう」

「もうなってるだろ」

「違うんだよ。ツエーマフによって操られてしまうんだよ」

ブン・ジョーは天を仰いだ。「お願いだから訳の分からない事ばかり言わないでくれ」

「本当なんだよ」

「突然いなくなっただけ追いついて必死こいて探し回ったけど見当たらんくて色んなカメラと連動させてもどこにもいなくて……どれだけ心配したと思ってるんよ。俺がいなかったら帰れないんだぞ」

二人の様子を、夜の闇が見守っている。

浮かぶ月が、浮かぶ星たちと目配せをしている。

風の音が耳に届き、今まで風が吹いていたことを知った。

「……」

「……」

二人の様子を、夜の闇が見守っている。

照る月が、耳を澄まして風の音を聞いている。

星が一つ流れてみせた。

流れた星は消えることなく遙か遠くの方まで飛んでいく。

沈黙を破ったのは、ブン・ジョーだった。「神の社には行かねえ。あそこには近づくなど言われてる」

「誰から？」

「マウスピースの中でみんな言ってる」

「でもあそこでリリー・ハレルヤに首輪を貰ったんだ」

「リリーが神の社に行くわけないだろ。彼女とは正反対の場所だ」

「ブン・ジョーは行ったことあるの？」

「あんな気味が悪い場所に行くわけないだろ」

「行ったことないのに知ったようなこと言うなよ」

ブン・ジョーが大きなため息を吐いた。「とにかく今日は家に帰ろう」

「どうしても神の社に行きたいんだ」

「ダメだ。一回帰って、冷静になって、話し合ってからだ」

「いや、今行きたいんだ」

投げやりになった表情が印象的だった。「じゃあ好きにしろよ。でも、俺は連れて行かねえからお前一人で勝手に行ってくれ」

「一人じゃ行けないからお願いしてるんだろ」

「そうさ。だから家に帰ろうって言ってるんよ」

二人の様子を、夜の闇が見守っている。

これまでも、これから、見守り通してくれるだろう。

このまま時間が経てば、陽が昇り、夜の闇は姿を消す。

それでも、見えない場所から静かに見守ってくれるのだろう。

「俺も疲れてるんよ」ブン・ジョーが必死に声を和らげようとしているのが分かった。「今日は念願のリリーのライブだった。でも途中で久兵衛がいなくなって、探し回って、リリーの歌声に集中できなくて、周りの人間に訊ねる度に嫌な顔されて、嫌な言葉を浴びせられて……それでも探したんよ？ 必死になって探したんよ。そんな俺の気持ち考えてくれたことあるんか」

「でも……」

「なあ久兵衛」

ブン・ジョーの瞳が潤んでいるのが印象的だった。「俺、寂しかったんよ」

『目の前で困っている奴がいたら迷わずダブルピンチョスシーだろ。それ食べ終わったらもう一回ゆっくり話してみようぜ』

ふと空を見上げた。月が、綺麗だった。

「……ごめん」言葉を洩らしていた。「自分のことしか考えてなかった。でも……」

「分かるよ。久兵衛の気持ちは痛いほど分かる。想いが溢れ出して止まらないんだよね。でもよ、まずは家に帰ろう。それで色々聞かせてくれ。それから一緒に考えよう」

差し出された手を握った。「ごめん」

「家に帰ったらポテイトーズチップスタイルにしようか。久兵衛の好きなピンチョスシー味はないけど、うまみそとコンソメキックなら戸棚に入ってる。どっちの味にする？」

暗闇が、おおきく肯いた。

「……コンソメキックにする」

「よし、帰ったらおやつタイムだ」

ブン・ジョーが指先を扱った。マウスピースに連れられて、帰っていく。何事もなかったかのように、残された空は暗闇。

星が散りばめられ、月が浮かんでいた。

*

スカンク…「どうしてエネルギーを使わなかったんです。寄り添うのですか？」
ザンバラ…「分からない」

スカンク…「分からないのに逃がしたのですか」

ザンバラ…「どこまでいっても信じたいと願うのが真心ではないか」

スカンク…「しかし、人間どもにそれが通用しないって言ったのは……」

ザンバラ…「分かん。自分でも分かんのだよ」

スカンク…「あと季節が一周もすれば必要なエネルギーが溜まります。そのときマウスピースの効力を奪えば人間どもは気が付くと思いますか？」

ザンバラ…「自分の事柄で精一杯になっている今の人間に他人を想う余白は残されていないだろう。地下都市にのみ込まれていく人間を見ているのはとても侘^{わび}しかったよ。なあ、スカンク」

スカンク…「当初は我々の思惑通りでしたが、これほどまでにマウスピースに依存するとは思いませんでした。人間は、もう少し賢い生き物であると思っておりました」

ザンバラ…「悲しいかな、タイムリミットが刻一刻と迫ってきている」

スカンク…「マウスピースの効力が奪われた時、人間はどうなると思いますか？」

ザンバラ…「何者かによって想像させられていたことを思い知り、自らの意思だけでは、想像できない肉体になっていることに慄くだろう。その状態がいかに下劣で醜いものであるか……気が付いた時には後の祭りだ」

スカンク…「そこがタイムリミットですか」

ザンバラ…「恐らく最後になるだろう。(季節が一周する前にあの人間が止めに来れば……いや、来ないか……)」

「あー、今日も最高に楽しかった！」

この空間を一蹴するような陽気な声と共に、リリー・ハレルヤが現れた。

「ご苦労だった」

と、ザンバラが言った。

「うるさい、ばーか。いつも言ってるけど、ザンバラのためにやってないから」

「口を慎め」

と、スカンクが言った。

「構わない」ザンバラの口調はとても優しくかった。「それでいい」

「やるじゃん」

「ホント生意気になったよな。昔はあんなに可愛らしかったのに」

「変わって当然でしょ。生き物なんだから。スカンクはそんなことも分からないの？」

「バカにすんな、分かってるよ」

「じゃあそれでいいじゃん」

「今日も必要以上のエネルギーが溜まったぞ」と、ザンバラが言った。「毎度ご苦労だ」

「だからザンバラのためにやってないから。いつも言ってるけど、私は私の使命のためにやっただけだから。それだけは忘れないですよ」

「使命だろうがなんだろうが結果としてエネルギーは溜まっていく」

「その時が来たら黄色い虫の声に手のひら返されろ、ばーか」
ザンバラのピアスがきらりと光った。

「その時が来たらすべてが分かるように出来ている。だからこうやって地道に積み重ねているのだ。長年、苦しみ耐え抜いた歴史とまだ見ぬ未来を受け継いで生きている」

ザンバラが、大袈裟に天を見あげた。「この地下都市には我々ツェーマフ一同の想いが詰まっているんだ」

*

「オコトさん、聞いてくれよ。久兵衛の様子がおかしい」

カウンターには、ピンチョスシーとバイスサワーが置かれていた。「この間、リリーのライブに行ったんよ。そしたらあいつ途中でいなくなつてさ、探し回ったけど見つからなくてさ、結局見つけるまで六時間……戻って来たと思ったら今度は神の社に行きたいか言い出して……もう本当に大変だったんだから。ザンバラとかスカンクとかよく分からないこと言うし、緑色の人間たちがチェーマフだとかなんとか言つてさ……」

「ほう」オコトさんの口元が、わずかに歪んだ。「そんなこと言うつたんか」

「神の社でリリーに首輪を貰ったんだって」

「かみのやしろ」

「エネルギーがなんだとか、リリー・ハレルヤの本当の名前はトトだとか……もうさ、なんか人が変わってしまったみたいだ。ライブの日からずっと部屋に籠こもって三味線弾いてるし、声を掛けても返事すらしてくれなくなったし」

「そこに理由はあるんか」

「神の社に連れて行くまで口を利かないと決めたんじゃないかな」

「連れて行ってないんか」

「行くわけないじゃん。気味が悪いよ」

珈琲の香りがふんわりと漂った。

「オコトさんは神の社に行ったことある？」

沈黙を恐れずに、自分の間合いで珈琲をたしなむオコトさん。

しばらく経ってから口をひらいた。「昔のことは忘れてしまった」

「そっか」

ブン・ジョーは、バイスサワーを一口のんだ。「神の社に行かないと地下都市に住む人間が人間じゃなくなるかもしれないって」

「ポテトサラダと春雨サラダ、どっちがいいか？」

「ポテトサラダ。それに……」

オコトさんの姿が、消えていた。

ポテトサラダを作りにいったのだろうか？

何かを発しようとしたブン・ジョーは、オコトさんがいないことに気が付いて言葉を飲み込んだ。そして、バイスサワーを口元へ持っていく。

わずかに、雨の音が聞こえてくる。

外では雨が降っていた。その音を捉えたブン・ジョーの指先が動きだす。数秒してから言葉の口にする。「ずっと雨か」

雨の音に聴覚をゆだねていた。その一点に意識を向け、その他への配慮を野放しにする。段階的に雨の音が肉体に染みわたり、集中の度合いが深くなっていく。「久兵衛は本当に江戸から来たのかな？」

ブン・ジョーの頭の中には岩佐久兵衛の姿が浮かんでいた。

乱れるように三味線を弾き、外からやってくる情報を遮断しているような姿。

自らの思惑だけに意気込み、これから進むべき道筋を見定めているような姿。

必死に、もがいているような姿。

久兵衛は一体、何を訴えているのだろうか？

ザンバラ、スカンク、トト、ツエーマフ、エネルギー、神の社……。

「そのうちマウスピース作って一人で行くって言い出すんじゃないか」

オコトさんが、ポテトサラダの入った器を持って現れた。

「もう言ってるよ」

器を受け取り、机に置いた。

ひとつ、呼吸を整えてからポテトサラダを口にする。

ポテトサラダに入っていたリングが口の中で音を立てた。

その後、キュウリの食感がやってくる。「美味しいよ、オコトさん」

「早く連れて行っておやり」

「嫌だよ、怖いよ」

「一人で行きよってもいいんか」

「……もっと、嫌だよ」

いつの間にかブン・ジョーの耳から雨の音が消えていた。

外ではまだ雨が降りつづけているのに。

頭の中で彷徨う久兵衛の表情はどれも健気にみえた。

ダブルピンチョスシー味を食べる姿。
初めて気流に乗る姿。

墓石の前で手を合わせる姿……。『どことなくシージェイに似てるんよ』
静かにバイスサワーを見つめるブン・ジョーは、その桃色の液体に何かを投影しているようだった。

「もう誰も離れて欲しくないんよ」

雨の音が、激しくなった。

「あのこと話したんか？」

「いつか話したいと思ってるけど……」

「話さんと伝わらん」

「分かってるよ。でも、思い返すのが怖いんよ」

沈黙が、雨の音を際立させていた。

風になびく雨粒。一直線に地面へ向かおうとする雨粒。雨粒になりたかった雨粒。雨粒になりたくなかった雨粒。

音の違いを楽しむオコトさんの間合いに、雨粒たちも喜んでいるようにみえた。

記憶と現実の岩佐久兵衛。記憶の中だけのシージェイ。食べかけのピンチョスシー。飲みかけのバイスサワー。

頭の中で巡る記憶の数々が、ブン・ジョーの聴覚を奪い去っていく。

この世には、雨の音が必要だった。

どれくらいの時が流れたのだろうか？ 冷めたホット珈琲に手を掛けたオコトさんが言った。「今おもう不安の種、声に出してみな」

ブン・ジョーの耳にふたたび、雨の音が入り込んでくる。

どうして雨は雨と呼ばれているのだろうか？

「……」

雨の音が、大きく肯いた。「大丈夫、聞くだけ」

「……」

漠然とした想いと共に、オコトさんの言葉が緩やかな速度を持って肉体へと沈んでいく。いつまで経っても、ダブルピンチョスシー味を食べる久兵衛の表情が忘れられなかった。

「……もしかしたら、久兵衛を神の社に連れて行くことで江戸に帰る手掛かりが見つかってしまふのを恐れているのかもしれない。シージェイがいなくなった時みたいな気持ちを味わうのが怖いのかもしれない。久兵衛だったら俺を変えてくれると期待しているのかもしれない」

何かに想いを馳せるように、沈黙を生みだすブン・ジョー。

ふたたび、口元を動かし始めた。「今まで地下都市の流れのせいにして、マウスピースのせいにして、誰かのせいにして、じぶんは悪くないと思わせていたのかもしれない。もう手遅れだと言いついて何も行動に移そうとしなかったのかもしれない。霊園に行ったり有楽蝶に來たりしてこの想いから目を背けていたのかもしれない」

この瞬間も、ポテトサラダは二口目を待ち望んでいる。

「俺は、俺の人生を歩めていないんよ。なあ、オコトさん。俺はどうしたらいいのかな？」

この瞬間も、ポテトサラダは二口目を待ち望んでいる。

「長い付き合いの中でようやく出たな。怖かっただろう？　だが一度言葉にしてしまえばそこからはどうとでもなる。想いを秘めているうちは誰にも伝わらん」

ブン・ジョーの頭の中には、シージェイの姿が浮かび上がっていた。

「待ってても誰も察してくれんぞ。もし察してくれる人間が近くにいるのならそれはとても恵まれている」

オコトさんは自分自身にも言い聞かせているようだった。「想いを声にして初めて準備が整う。衝突するときもあれば絶賛されるときもある。合致するときもあれば拒絶されるときもある。それらはその時々で姿や形を変えるだろう。想いは、一つだけじゃない。だから、吸って、吐いて、積んで、崩して、混ぜて、伸ばして、こねて、ちぎって、叩いて、割って……。いろんな想いをたくさん作ればいい。一つ、二つ、三つ、四つ、五つも六つも七つも八つも、いろんな角度からいろんな想いを同時に持てばいい」

オコトさんの人差し指が、ブン・ジョーの胸元に向けられた。「でもそこにあるうちは、一つだけだと思いつ込んでいるだろう？」

どうしてだろう、胸が熱かった。

「想いを声に出さんと自分を知らないよ。自分を知らない誰とも分かり合えないよ。久兵衛を大切だと思うのならブンの素直な想いをこの世に表してみな。久兵衛はちゃんと向き合ってくれるだろう。想いを伝え合ってその時のふたりの答えをたくさん生みだせばいい。何か一つに決めなくてもいい。シージェイと出来なかったことをやればいい。ブンがそうしたいと願うのならばな」

「もちろん願ってるよ。でも……」

想像させられていた。思考回路の癖が流れのままに流れている。「無理だよ。俺は出来損ないだ。頭では分かっているんよ。全部分かっているんよ。シージェイの時もそうだし今回だってそうだ。想いが強くなればなるほど伝えられなくなっちゃう。考えて、考えすぎて……。現実は何も変わってないのに頭の中だけがぐちゃぐちゃになっていく。想定して消極的な想いばかり抱いて卑下してこの世界から逃げ出したくて目を背けてしまうんよ」

「なあ、ブン。ポテトサラダ食って、バイスサワー飲め」

雨が降り注いでいる。

朝が来るまで音を立てつづけるつもりだろう。

「なんだか辛気臭いねえ」

ふたりはそれぞれの世界観へ戻っていった。

静けさに含まれる無数の音が、この地下都市を見守っている。

珈琲が喉を通る音。ポテトサラダを味わう音。バイスサワーの音。有楽蝶そのものの音。知らない間に音が鳴り、知らない間に去っていく。

雨粒の音に想いを馳^はせる人間は、いつかの誰かを想っているのだろうか。

*

ザンバラ…「再び春が訪れる頃、エネルギーが最大許容量を満たすだろう。庄之助、遂にツエーマフと人間の立場がひっくり返るぞ」

庄之助と呼ばれる人間の肌の色は青かった。「そんなに生き急ぐ必要がある？」

ザンバラ…「早いにこしたことはないだろう。そのために長年、頭を使ってきた」

庄之助…「ザンバラ、考えすぎだよ。もっと感じないと」

ザンバラ…「庄之助」

庄之助…「適度に気を緩めないと人間と同じになっちゃうよ」

見渡す限り芝生だった。

大きな桜の木が、どかと真ん中に立っていた。

庄之助…「果たして人間はどこまで求めれば気が済むのだろうか……。まあ、僕も人間なだけどね」

寛大な空が、遠くの景色を眺められるように手解きしているようだった。

緑が映え、木々が、木の実が、花の香りが、鳥の羽ばたきが、長閑にまじり合い、深い呼吸を生みだしている。

その、あまりにも雅^{みやび}やかな時間に足を踏み入れたとき、頭の中が空っぽになって、等身

大の記憶に光が当たる。

庄之助…「自然がないと生きていけないのに」

風が吹き、桜の花びらが、ゆらりゆらりと舞い散った。

そのまま、芝生の上に横たわる。

ザンバラ…「むかしは地下都市全体が自然で溢れていた」

庄之助…「僕が生きていない時代か」

ザンバラ…「今はこうして限られた場所に限られた者だけが集^{つど}っている。マウスピースに染まった人間たちは、花も、鳥も、虫も、緑も、失ったことさえ気がつかなかった。むしろ、自分たちで遠ざけているようにもみえたよ」

庄之助…「狭い空が好ましいと考える人間もいる」

ザンバラ…「なあ、庄之助。人間とは何者なんだ？」

庄之助…「知りたくない」

温和な雰囲気だった。

ザンバラ…「生きては絶えるを繰り返し、代わる代わる肉体が移りゆくこの人間の奇妙な時の流れを受け入れるには、有限である人間にとってあまりにも無慈悲だ」

庄之助…「出たよ。訳の分からない格言じみたもの」

ザンバラ…「人間は、その無慈悲さに抵抗しているのか？ 元来ならば自然とこの場に導かれるはずだろう」

赤、橙、黄、緑、青、紫。

あらゆる色合いの人間が遥かなる景色の一部と化していた。

鳥の声を耳から、花の香りを鼻から、緑のうつくしさを目から、澄んだ空気を心から取り入れ、波風が立たない穏やかさを、ありのままに受け入れている。

でもどうしてだろう、荒れ狂う生命力を微塵も感じさせなかった。

庄之助…「むかしは僕らもあちら側だった。でもこうして少人数ではあるけど、感じて行動した人間たちがいることも確かだ」

ザンバラ…「初めてここに来た時の庄之助は半信半疑で恐れているようだった」

庄之助…「今では海のように穏やかだ」

ちょうど、芝生で走り回っていたスカンクが戻ってきた。「それ、自分で言う？」

庄之助…「そりゃあ自分でも言うよ。スカンクには敵わないけど」

スカンク…「分かりきったこと言うな」

スカンクは照れを隠すように又、走り始めた。

庄之助…「そういえば、リリーは？」

ザンバラ…「使命に従って生きている」

庄之助…「相変わらず彼女も頑固だね」

ザンバラ…「使命に身を委ねなければ正気を保てないのだろう。リリーの気持ちはよく分かる」

庄之助…「僕はよく分からないなあ」

走り回るスカンクの姿は、人智を超えていた。

緑の寛容さが、無限大に広がる空の誇りに、語り掛けているようだった。

庄之助…「ここは、理想郷だ」

ザンバラ…「エネルギーを使えば強制的にこの環境に戻せるだろう。そうすれば使命も何もかもが消え去って循環した時の流れが自然の摂理をもたらせてくれる」

空中には、花の香りが飛んでいた。

スカンク…「リリーは、エネルギーによって作られた理想郷だとそう長くは続かないとか言ってたな。心の揺れ動きに打ち勝つからこそ未来が拓けるとか何とか」

庄之助…「それは、空に猫が浮かぶくらい難しい話だ」

空には、鴉が飛んでいた。

ザンバラ…「当初は叶うと信じていた。でも、それが叶わなかったからエネルギーを使わざるを得ないのだ。我々は人間を買い被りすぎた」

スカンクの鼻にでんとう虫が止まった。

空では、太陽が輝いていた。

スカンク…「そういえばこの前、ツエーマフが緑色の人間だって言ってた奴がいたぞ。悲鳴が魂になったとか何とか」

庄之助の肩に鴉が止まった。

庄之助…「へえ。そんな人間、まだいるんだ」

ザンバラ…「その人間の肩に鴉が止まった」

庄之助は、鴉の頭を撫でた。

庄之助…「その人間のこと、気になるのか？」

鴉が、みじかく鳴いた。

庄之助…「そうか。おまえがそう言うのならそうに違いない」

スカンク…「でもどうしてツエーマフの存在を知っていたんだ？」

庄之助…「もしかしたら夢の中でツエーマフと出くわしたのかもしれないね」

スカンク…「また、夢の話だ」

鴉が、みじかく鳴いた。

庄之助…「やっぱりおまえもそう思うか」

ザンバラ…「その人間は、ツエーマフと人間が手を取り合うことは出来ないのか、と言っ

た」

太陽に向けて、てんとう虫が飛んだ。

スカンクが両手を広げて捕まえようとしたが、捕まえられなかった。

庄之助…「興味深い。一度、会ってみたいな」

上空に向けて、鴉が飛んだ。

ザンバラ…「庄之助、どう思う？」

庄之助…「僕は眠るよ。夢がみたくなった」

ザンバラ…「……」

スカンク…「庄之助の夢ってそんなに良いものなのか？」

庄之助…「夢の世界で生きるために、現実を扱っているようなものさ」

スカンク…「俺は、力士に倒される夢ばかりみるぜ」

庄之助…「それは羨ましい限りだ」

スカンク…「今日はどんな夢をみるんだ？」

庄之助…「一番星になって深海魚を照らす夢がみたいな」

スカンク…「力士に倒される夢見たら教えろよ！ 共感し合おうぜ」

庄之助…「共感なんてできないよ。夢は、その持ち主の浪漫だ」

さるかわしうのすけ
猿川庄之助は、空飛ぶ鴉を目で追いながら、芝生に寝転んだ。

*

水平線を眺めていた。

波の音が聞こえてくる。水面に反射する太陽の輝き。海は広くて大きい。そして、目には見えないけれど、とてつもなく深い。

「神の社じゃないじゃん」

不貞腐れている声だった。

「後でちゃんと連れてってやるから」と、ブン・ジョーが返した。「俺にも準備が必要なんよ」

波の音が寄せては返す。

ざぶん、ざぶん。

ざぶん、ざぶん。

見渡す限り青かった。

空の青さと海の青さを水平線が二つに分けている。

異なる青色が全面に広がる。

雲ひとつ見当たらなかった。

「海の向こう側には何があるんだろう」

「何もねえよ」

と、ブン・ジョーが返す。

「……」

「……」

二人とも、頭の中の自分との対話で埋め尽くされているようだった。お互いが、相手からの歩み寄りを待ち望んでいるようにみえた。

「……」

「……」

波の音だけが聞こえてくる。

そのとき、空は思った。

両手を広げて飛べばいいのに。

そのとき、海は思った。

両手を広げて泳げばいいのに。

この二つを分ける水平線が、そのとき思った。

覚悟を決めて話せばいいのに。

そんな簡単なことじゃないんだよ、と波が返す。

寄せては返す。

ざぶん、ざぶん。

『久兵衛を大切だと思うのならブンの素直な想いをこの世に表してみな』

オコトさんの言葉が聞こえてくる。

まずは、自分から……。

ブン・ジョーは言葉を発しようとした。けれども、思うように言葉が出てこなかった。

シージェイの姿が、風に乗ってやってくる。

遙か昔の声色が、ブン・ジョーの頭の中で鳴った。その音は、とてもきめ細やかだった。

『想いを秘めているうちは誰にも伝わらん』

オコトさんの声が、背中を押す。怖いけど、言葉が洩れた。「な、なあ」

久兵衛は返事をしなかった。

ざぶん、ざぶん。代わりに、波の音が返事をする。

「神の社に行きたいんか？」

「何百回も言ってる」

「行っとうするんだ？」

「別になんでもいいじゃん」

「江戸に帰るのか？」

不貞腐れているのが、手に取るように分かった。

「なあ、どうなんだよ？」

それでも、言葉を吐き出してしまおう。

吐き出していないと壊れてしまいそうだから。

「何とか答えたらどうだ？」

「神の社に連れて行ってくればなんでもいいよ」

会話が途切れた。空気は目に見えないのに、重いことだけは分かった。

「……」

「……」

沈黙が、ブン・ジョーを締めさせようとする。

どうせ俺は同じ轍を踏みつつける運命なんよ。

太陽が、きらりと輝いた。海面が光る。波に揺れ、移ろう。太陽の言葉が、耳の中で寄り添ってくれる。どうして卑下する？ 久兵衛を連れ出して海までやってきた。それだけでも大したことじゃないか。とても立派だぞ。褒めてあげないと。

「……」

ブン・ジョーは、頭の中で唱えた。慰めるのはやめてくれ。惨めなだけなんよ。

お前さんは何も分かってねえなあ。だから変わらないんだよ。

変わらなくていいんよ。どうせこのまま変わらないから。

そうやってまた同じところに居座るんか。

だって無理なものは無理なんよ。俺は、そういう人間だ！

お前さん、自分で自分に蓋をするなよ。

太陽が、きらりと輝いた。

目覚めるきっかけを与えることは出来るけど、実際に目を覚ますかどうかはお前さん次第なんじゃねえの？

波の音が寄せては返す。

ざぶん、ざぶん。

ざぶん、ざぶん。

見渡す限り青かった。

異なる青色が全面に広がる。

雲ひとつ見当たらなかった。

「……」

「地下都市なのに、どうして海が広がってるの？」

「……」

「海の向こう側には何があるんだろう」

「……俺もずっと知りたいんよ」

そこには、間合いとか、相手の顔色とか、空間の調和とか、一切含まれていなかった。頭から生みだされた世界からは程遠い、中庸が似合う景色だった。

「……」

「……これは独り言だから」

と、ブン・ジョーが言った。

「昔な、海が見える家に住んでたんよ。窓からよく眺めてた。朝から夜までずっと眺めていたときもあったな。いつも二人で一緒に眺めてたんよ。そいつは桃色の肌をしていて、シージェイと呼んでいた。とにかくあいつは海が大好きだった。色んな話をしたよ。くだらない話の方が多かったけど、真面目な話をしているといつの間にか俺への説教が変わってるんよな。あれは、嫌だったな。二人でたくさん泳いだし、たくさん絵を描いたし、たくさん時間をこの海で過ごした。俺はその幸せがずっと続くと思ってたんよ。でもな、ある時シージェイが言ったんよ。海の向こう側には何があるんだろうって……。そんな考えたこともなかった。一緒に行こうって言われたよ。俺は何も返せなかった」

一つ、空白が生まれた。波の音も、太陽の輝きも、変わらずに、見守っている。

「今さ、こうやって話していて思ったけど、あいつはその先を見てたんよな。いつもいつもその先に目を向けていたんだろうな」

一つ、二つ、三つくらいの空白が生まれた。

ブン・ジョーの息づかい以外は何も変わらなかった。

「シージェイは海の向こう側へ行く準備をし始めたんよ。マウスピースで調べたり、地下都市の人間に聞きまわったり、実際に泳いでみたり……。あいつの活き活きとした表情を見ると嬉しくなったし、けど、同じくらい寂しくなった。そんなシージェイに俺は反対意見ばかり伝えてしまっていた。怖かったんよ。置いてかれる怖さとか、変化を拒む自分の愚かさとか、行動できない惨めさに恐れていたんだ。だからどうにかしてこの場に留めておこうとした。でもな、シージェイは一度決めたら艇でも動かない奴だった。段々口数が減って、会話が少なくなっって、家にいなくなっってな。ある日、手紙を残して俺の前から去ってしまったんよ」

又、三つくらいの空白が生まれた。

「なあ、久兵衛」

ブン・ジョーは、青い景色を眺めたままだった。

「俺な、久兵衛を神の社に連れて行きたい気持ちには山々なんだ。でも、それでお前がいなくなってしまうことを考えたら寂しくて仕方がねえんだ。俺な、久兵衛がここに来てから楽しいんよ。なんか分からんけど、楽しいと思うときが増えたんよ」

そう言い放ったブン・ジョーは、急に怖くなった。心の柔らかい部分が、開いている。今すぐ逃げ出してしまいたかった。なんでもいいから早く返事が欲しかった。だって、そうじ

やないとあることを勝手に考えてしまうから……。

シージェイの姿が、頭の中に浮かんだ。同時に、味わいたくない感情もついてきた。見渡す限り青かった。

想いが溢れて仕方なかった。「不思議だよな。こうやって思い返すと苦しくなるからあれ以来、海には行かなかったけど、やっぱりこの景色は美しいんよな」

真っ正面から海を見据える。横から、風が吹いた。

「涙を流すのは恥ずかしいことじゃないよ」

岩佐久兵衛は、どうしてこの言葉を口にしたのか分からなかった。芽生えた感情のままに伝えたわけではなかったから。

ブン・ジョーが想いを寄せるシージェイとの過去に関心があるわけでもなかったし、シージェイがどういう人間だったのかに至ってはもっと関心がなかった。ブン・ジョーが自分といて楽しいと言ってくれたことにも心は揺れ動かなかった。隣で鼻を吸^{すす}るブン・ジョーには申し訳ないけど、それが現実だった。

それでも、目に映る水平線がこんなにも美しいと思えたことは今まで一度たりともなかった。

口から言葉が零れ落ちている。「ブン・ジョーにそんな過去があったなんて知らなかったし、思いもしなかった。シージェイの話をしてくれてありがとう。でも、ブン・ジョーはラッキーだよ」

ざぶん、ざぶん。

「振り返れる過去があるだけでも素晴らしいなと思ったよ」

その言葉を聞いたブン・ジョーは、きよんとした。そんなの考えたことなかったから。

「大丈夫だよ。また会える」

ブン・ジョーの視線の先には水平線があった。

もしあのとき、想いを伝えることが出来ていたら、どうなっていたのだろうか。無性に、バイスサワーが飲みたくなった。

*

「トト、いるんだろ！ 出てきてくれよ！」

「どうだ？」

と、ブン・ジョーが言った。

「なんだか気味が悪い」

「言ったじゃねえかよ。初めて来たけど、本当に気味が悪いな」

トトの名前を何度も呼んだ。

しかし、返事は返ってこなかった。

「本当にここで出会ったんか？」

「そのはず……。でも、なんか違う気がする」

「分かっただろ。早く帰ろうぜ」

鳥居、ゆらゆら、自分に戻る唯一の場所、鼻筋、心地がいい、どろどろ、神聖な空間、砂利、声なき世界、混沌とした感情、左脳で聞いた、三味線、虫の声……。

「……そうだ。虫の声が聞こえない」

「そりゃあそうだろ」

ブン・ジョーが、つぶける。「地下都市に虫がいるわけねえだろ。動物だっていないんだから」

こめかみの辺りに衝撃が走る。では、あの鴉は？

「鴉は？」

「鴉なんているわけねえだろ。マウスピースでしか見たことねえよ」

「動物に会ったことは？」

「そりゃあ、会えるなら会ってみたいよ」

ブン・ジョーが、神の社を見渡しながら言った。「久兵衛、これが現実なんよ」

鴉の表情が、頭の中に描かれていた。

又、言葉を発していた。「じゃあ、植物は？」

「また訳の分からねえこと言ってるよ」

「植物、知らないの？」

「知らねえよ。シヨクブツってなんだよ。聞いたことも見たこともねえよ。なあ久兵衛、早く帰ろうぜ。やっぱりマウスピースの情報は正しかったんよ。ここは、気味が悪すぎる」
空には雲ひとつ見当たらないのに、頭の中で雷が鳴った。

*

赤コーナーより、ヒゲ・アトラクション選手の入場です！

(どうも、ヒゲです。名前を呼ばれたので試合に出るのです)

ラウンドワーン。ファイトッ！

「と、言うことでお便りいただいております。ラジオネーム、餅つきペツタン兎さん^{もちつき うさぎ}。どうもありがとうございます！ 心を込めて読ませて貰いますね。

『先日、くそつくりの理不尽に直面したのに何も言えませんでした。ちゃんとオカシイと思えているのに愛想笑いしながら、「そうですね」なんて口走っていました。

怒ることも、泣くことも、不貞腐れることも、真っ向からオカシイと伝えることも出来ませんでした。

帰り道になっても、愛想笑いが頭から離れなかった。自分が悪かったのだろうか？ とか、どっからどう見ても相手が悪いに決まってる！ とか、行ったり来たり彷徨っていました。

この悶々^{もんもん}を早く終わらせたくて早く納得したくて、自分も悪いところがあった。と言いつて聞かせることに成功しました。一歩引いて言い聞かせている自分を偉いと認めてあげること、で正気を保とうとしました。嘘でもいいから心を躍らせようと、夕暮れの河川敷をスキップして帰りました。

それでもむしろしゃしゃりしたから買い物に行きました。野菜を買って、お肉を買って、魚を買って、卵を買って、いつもより多めにスイーツも買って家に帰った。

買った食材を冷蔵庫に入れているとき、卵を床に落としてしまいました。割れた卵を見た瞬間、今まで溜め込んでいた『何か』が決壊して、膝から崩れ落ちて、全部がどうでもよくなってしまうました。もし、あの時のじぶんにあだ名をつけるのならば、「盆踊りまっしぐら」と命名したいと思っています。

床に這いつくばる黄身と白身の姿を見ると、涙が溢れてきました。何が何だか分からなかったけど、悔しくて仕方がなかった。

久しぶりに泣きじゃくっている自分を感じて、『窮屈だよ』って声が聞こえてきました。その声に肯いたときには、床の卵を丁寧^{ていねい}に拾っていました。

割れた三つの卵で作った玉子焼き。人生で一番おいしかったです。

P・S 人生は窮屈で生き辛いけど、それでも十五夜のお月様はいつも綺麗です』

(てかよ、青コーナー側の選手って誰なんだ？)

……べったんこーりゃあ、ホイホイホイサのホイー。餅つきペツタン兎さんには、オリジナルステッカー送るときまーす。卵が割れた分だけ、三枚送るときまっせ。ありがとう！」

ラウンドツー。ファイトツ！

「と、言うことでまたまたお便りいただいております。ラジオネーム、正直生真面目^{しょうじきまじめ}さん。どうもありがとうございます！ 心を込めて読ませて貰いますね。

『あつ、ウンチが漏れた。パンツに付いた。

ワンツーパンチ

ワンツーピンチ

アゲイン、アゲイン、わっほいほい！

ワンツーパンツ

ワンツーウンチ

アゲイン、アゲイン、わっほいほい！

ワンツーパンツにウンチ

ワンツースリーでパンツにウンチ

漏れた

付いた

漏れた

付いた

漏れた！ 付いた！ 超ラッキー！

ラッキー、ラッキー、ラッキッキー！

P・S 最近、運気がブリブリです』

（ところでよ、うんことうんちって明確な違いがあるの知ってた？）

……べったんこーりや、ホイホイホイサのホホイのホイー。正直生真面目さんには、オリジナルトレットペーパー送るときまーす。これで一安心だね！ でもやっぱりオリジナルブリーフも送っちゃおう。これで準備万端だ！ ありがとう！」

ラウンドスリー。ファイトツ！

「と、言うことで本日最後のお便りいただいております。ラジオネーム、イカしたスニーカーさん。どうもありがとう！ 心を込めて読ませて貰いますね。

『私には生まれた時から背負っている使命があります。先祖代々この仕来りを守り続けて生きてきました。先代も先々代も目を背けることなく生まれてから死ぬまで立派に使命を全うしました。そして私も今、それらを受け継いで生きています。山あり谷あり、もう辞めてしまいたいと思う時もあれば、意地でも続けてやるって思う時もあります。とっても不思議です。両方とも私なのに、両方とも私じゃないみたい。

最近、その使命が果たされる日が近づいている予感がしています。正直、使命が果たされたときのことを考えると夜も眠れません。

もし、使命が果たされたのなら私たち一族の願いが叶います。同時に、この世界を揺るがすことになるかもしれません。

起こってみないと分からないのは知っています。でも、起こってからでは遅いことも知っています。

本当は素足で踊りたいし、本当は雨の日が好き。本当は会いに行きたいし、本当は全部話

してしまいたい。

私は、この一度きりの人生、なにを優先するべきなのでしょう。その答えが欲しいとは思いませんが、背負う天命に逆らえない人生があることも知って欲しいと思っています。

P・S 黄色い虫の声、私を見つけて』

(全部分かつちやいるのに死人に口なし。思い描くことしかできねえのな)

……べったんこーりや、ホイホイホイサのホホイのホイー。イカしたスニーカーさんには、オリジナルスニーカー送ってきます。履かなくてもいいからどこかに飾ってね。よし、決めた。奮発してオリジナルレインコートも送つとかうか。イカしたスニーカーさんにとって雨の日が晴れやかになるように願いを込めておきますね。

(だからよ、青コーナー側の選手だけでもいいから教えてくれないか?)

それではまた来月、縁と運^{えん つき}を呼ぶ十五夜の日に会いましょう!

……べったんこーりや、ホイホイホイサのホホイのホイー」



「また音が乱れた」と、ブン・ジョーが言った。
聞こえてはいたけど、構わずに弾きつづけた。

「音、乱れてるんよ」

ブン・ジョーの家の一番奥の部屋、三畳一間の空間で向かい合っていた。

ブン・ジョーが演奏を止めた。
それに合わせて演奏を止めた。

それに合わせて演奏を止めた。

「音、乱れてるって」

「そうは思わなかったけど」

「最近一緒に弾く時間が減ってる」

「一緒に弾くのも一人で弾くのも変わらないよ」

「三味線弾くの好きなんだろう？」

「好きだけど」

「好きなら弾こうぜ」

「二人でも弾けるから大丈夫」

「二人だと感覚が鈍るぞ？」

ブン・ジョーの言葉すべてに、違和感をおぼえた。

「ちよつと出掛けてくる」

「どこ行くんよ？」

と、ブン・ジョーが返した。

「……」

「また逃げんのかよ」

「逃げてない。気分転換するだけ」

「それが逃げてるって言うんよ」

ブン・ジョーに、背中をむけて離れていく。

「こういうことになるからマウスピースなんて作らない方が良いつて言ったんよ。おい、久兵衛。江戸に帰る手掛かり見つけないのかよ。そんなんじゃツエーマフとかいうのにも会えねえぞ。なあ、いつまでも想像の世界で生きてても何も変わらねえ。自分の思い通りにならないからって投げ出すのやめろ。おい、久兵衛。聞いてんのかよ。おい！ ちゃんと扉閉めてけよ！」

岩佐久兵衛は、ポケットからマウスピースを取り出した。そのまま啣えて親指と人差し指

を二度トントンと突き合わせてから宙に向かって行き先を伝える。

しばらくして、気流に乗った。

「そういう自分は出来ているのかよ」

地下都市に降り立ってから二百回眠った。季節が半周したようだ。初めて浴びた気候とは真逆のものが肉体に染み込んでくる。日常から受ける刺激が減り、意識から習慣へと移った。都市を見渡すのは、見たいものがある時だけ。それ以外は、無関心というよりも視界にすら入ってこなかった。

ついに、マウスピースを作った。

あらゆる反対意見をブン・ジョーから伝えられたけど、想いは変わらなかった。自分だけの目で確かめてみたかったから。

初めてマウスピースを着けたとき、衝撃が走った。ブン・ジョーからの忠告を耳にしていたにも関わらず、想像を遥かに超えた感覚を得た。

咥えている間はマウスピースから転送された選択肢が、頭の中に表示されつづけている。行きたい道筋が現れて、見たい映像が流れて、知りたい情報が勝手に飛び込んでくる。今まで扱ってきた言葉、行動範囲、感情の起伏を元に、厳選された選択肢が浮かび上がり、身に着ける人間が選びやすいように配慮されている。

導いて、教えて、叶えてくれる。

どこからどう捉えても、快適だった。

霊園にも、有楽蝶にも、神の社にも、一人で行けるようになった。でもどうしてだろう、手掛かりは掴めなかった。ヒゲ・アトラクションは現れないし、オコトさんは黙^{だんま}りを貫いたまま。昼夜問わず訪れた神の社は相変わらず気味が悪くて、誰とも出くわさなかった。

ライブ会場にも向かおうとした。けれども、選択するにはパスコードが必要でたどり着くことさえ出来なかった。

何とかして手掛かりを掴みたくて、四六時中地下都市のカメラと連動させたこともあった。ザンバラもスカンクもトトもどこかに隠れているかのように一度も映し出されなかった。

カメラに映る人間たちの表情は疲れているようで、どこか虚しそうだった。目を凝らせば凝らす程、その虚しげな表情が視界に入り込んで離れなかった。

動物の名も植物の名も、耳にすらしなかった。あの鴉は、幻だったのだろうか？

マウスピースを作ってから、たくさんの情報を取り入れた。たくさんの場所に足を運んで、たくさんのカメラと連動させた。たくさんの人間の声を聞いて、たくさんの人間に想いを伝えた。

『どこに行けばツエーマフに会えますか』

『ザンバラとスカンクという人間を知っていますか』

『このままでは地下都市に住む人間が操り人形にされてしまいます』

誰も相手にしてくれなかった。鼻で笑われるか、変な奴に見られるか、無視されるか、有り得ないと呆れられるか、聞いているかのような相槌を打たれるか……。

緑色の肌の人間に訊ねても、白を切るように遠い目をしていた。

空を見上げる。狭い空がより一層狭くて、すべてが敵に見えた。

『こういうことになるからマウスピースなんて作らない方が良いつて言ったんよ』
ふとしたとき、ブン・ジョーの口癖が頭の中に現れて、悲しくて哀れになった。

*

「今日も一人か」

と、声を掛けられた。

「一人の方が気楽だよ。気を遣わなくてもいいし」

「それはそうだけど、傍にいてくれる人は大切にしろよ」と、パン屋の店主が言った。「カレーパン以外も買ってけよ」

マウスピースを作ってから頻繁に訪れる店。

『バビディ・ブー』

あてもなくどこかへ出掛けようとしたとき、マウスピースの行き先の選択肢に入っていたことがあった。何気なく選択して、到着して、店内を見回って、手に取ったカレーパンを一口食べたとき、驚愕した。

ポテイトーイズチプスのダブルピンチョスシー味を食べたとき以来の衝撃だった。気が付いた時にはもう二つ買っていて、家に帰ってからブン・ジョーと一緒に食べた。ブン・ジョーは、こんな店があるなんて知らなかった、と目を丸くして喜んだ。

一時期、ブン・ジョーと一緒に毎日のように通った。すると、店主に声を掛けられた。嬉しくなって、二人で想いを伝えたのを覚えている。

家庭的で安心する味です！ どうしたらこんなに美味しいパンが作れるんですか！

店主は律義に答えてくれた。

それもこれも、美味しいと言って食べてくれる人がいるからだよ。

最後にブン・ジョーが、ライスに掛けてカレーライスにして食べてみたい、と言った。大きな声で笑った店主は、ここはパン屋なのに、と言って姿を消した。失礼なこと言うなよ！と言ったのを覚えている。それに対してブン・ジョーは、食べてみたいもんは食べてみたいんだから良いじゃねえかよ、と答えたのも覚えている。

しばらくして、威勢の良い笑い声が近づいてくる。

「ほら、望み通りのカレールーだぞ。いつもありがとうね」

家に帰って食べたカレーライスの味は、死んでも忘れられないだろう。

空間に漂う記憶に浸りながら商品を持っていく。あんドーナツ、ジミートースト、コロツケパン、カレーパンを一つずつ。

店主のジミーが待っていた。「どうだ。色々と、うまくいってるか？」

「ぼちぼちだよ」

「ツエーマフには会えたか？」

「なかなか難しいよ。行動しているつもりなんだけどね」

「俺にはよく分からない話だけど、会えたら良いよな」

「このままじゃ地下都市に住む人間はツエーマフに操られてしまう」

「そうか」と、ジミーが言った。それ以上、深入りしてこなかった。

「最近、ブン・ジョーはどうしてる？」

「ぼちぼちやってるよ」

言葉がつづかなかった。「そういえば、この前食べたエビピラフのお店が感動するくらい美味しかったよ。ジミー、エビ好きだよな？ このお店行ったことある？ 今、そっちに情報送る」

不慣れながらも指先を動かしていた。「送ったよ」

「……へえ、専門店か。最近オープンしたみたいだな」

「ぜひ行ってみて。気に入ると思うよ」

「仕事終わりに行ってみるよ」

ふと、ジミーの指先に目がいった。年季が入った手だと思った。

「ジミーはどうしてパン屋になろうと思った？」

「パンが好きだったからかな」

「今も好き？」

「正直もう分かんないよ」

「辞めたくなる時ないの？」

「毎日おもうよ」

「嘘だ」

「これが本当なんだな」ジミーは、苦笑いを浮かべていた。「でもそれと同じくらい続けていたいと思うかな。ホント、人間って生き物は厄介だよ。毎日色んな想いが襲ってくるんだからよ」

ジミーの仕草の一つ一つが安らぎを与えてくれる。「久兵衛はどうして三味線を弾いているんだ？」

「わかんないよ」

「そうなるよなあ……。理由なんて取って付けたものなのかもしれないよな。始める理由と続ける理由が違っていいだろうし、別に理由なんてなくてもいいだろうし。俺の場合、結果として辞めてないから続いているんだろうな。あとは、家族を養うためか」

どうしてだろう、無性にトトに会いたくなった。

「無理に続けようとしなくても、辞めなければ勝手に続いていくように出来ているのかもしれないなあ」

何かを想像しているようなジミーの表情が印象的だった。

「ま、お腹が空いたらいつでも来いよ」

「ねえ、どうしてそこまで思ってくれるの？」

「俺が作るパンを心の底から褒めてくれるからだよ」

そう言うときジミーは店の奥へ消えていった。

しばらくして、戻ってくる。「これ、ブン・ジョーにも持って行ってやれ。一緒に食べろ」

一つずつだったパンが、すべて二つになっていた。

後これも、とカレールーが入った容器も渡してくれた。

*

「また一人で来たんか」

と、オコトさんが言った。

何も言わずにバイスサワーを用意する。

そして、カウンター席に座った。「もらったよ」

海の匂いをする。

「誰かいた？」

「いいや誰も」

辺りを見回す。やっぱり海の匂いがした。

「今日はジミーのパン買ってきたから春雨サラダはいらないや。二つずつあるからオコトさんも一緒に食べようよ」

心が、渴いている声がした。

「ブンはどうしてる？」

「最近一緒にいることが少ないから分かんない」

「その言葉、ブンも同じこと言うと思った。そこに理由はあるんか？」

「……」

「朝起きてから寝るまで会わない時もあるって言うと思った」

「……だって、じっとしてるとおかしくなりそうなんだもん」

「だから片っ端から動き回るとるんか」

「出来ることは全部やってるつもりだけど、先が見えなくて歯痒いんだ」

ジミーが作ったカレーパンを食べた。
想像どおりの味で安心した。

「ここの暮らしに馴染めば馴染むほど、本当に江戸から来たのか分からなくなってきちゃった。岩佐久兵衛って誰なのか。江戸ってどこなのか。タイムスリップって何なのか……振り返ることが出来ないのは、やっぱり辛いよ」

海の匂いが、鼻の奥を通り抜けていく。

ブン・ジョーとふたりで水平線を眺めた記憶が蘇ってきた。

「シージェイってどんな人だった？」

「気になるんか？」

「少しだけ」

「……ジェイは、自分の物語を描ける人間だった」

「海の向こう側に行ったのかな？」

「……」

「どうしてブン・ジョーを置いて行ったんだろう」

「ブンは優しすぎるからな」

優しさが、鼻の奥を通り抜けていく。

「……俺の母さんは、どんな人だったんだろう」

少し経ってから、今の言葉が自分の口から放たれていたことを知った。

「オコトさんの母さんはどんな人だった？」

八秒の静寂が、有楽蝶を包んだ。

「酷い人だった」

その声は何かを明確に思い浮かべているようだった。

又、八秒間の静寂が、有楽蝶に舞い込んだ。

「憧れの人でもあった」

その声は何かを明確に思い浮かべているようだった。

「どっちなの？」

「どっちも」

海の匂いが、消えていた。

「今日はそのパン持って大人しく家に帰れ」

「一緒に食べようと思っ……」

「考え事ができたから早く帰れ」

奥行きのある声色だった。

「……分かったよ」

半分くらい残ったバイスサワーを飲み干した久兵衛は、何も持たずに席を立った。指先を動かしながら出口に向かって歩いていく。

「一つだけ忠告しといたる」

有楽蝶の扉を開けようとしたとき、オコトさんの声が聞こえた。

「無用な情報ばかり拾っていると本当に大切な瞬間を素通りすることになる」

頭の中で鴉の声が鳴った。

「言われなくても気を付けてるから大丈夫だよ」

*

久兵衛がいなくなった有楽蝶に、ひとりぼつんとオコトさん。面影に向かって語り掛けていた。「……お母ちゃんの言うてた通り、時代は立ち止まることを知らないみたいや」

*

そのまま家に帰ってきた。消えている灯りを点ける。食卓には、一枚の紙が置かれていた。

『あんまり無理しすぎんなよ』

そっと、奥の部屋を覗いた。ブン・ジョーが大の字で寝ている。

ブン・ジョーに背負われて眺めた地下都市の風景を思い浮かべていた。なんでも知っているように見えたブン・ジョーへの安心感が一瞬だけ蘇ってきた。

「あの時の気持ち、どこいったんだろ」

マウスピースを外した。

頭の中に転送されていた情報が一斉に消える。

底知れぬ不安が襲ってきた。

「俺は一体、何者なんだよ」

ザンバラ、スカンク、トト、ツエーマフ、エネルギー、神の社……。

視線の先には三味線が立て掛けられていた。

「どこから来て何をさせられているのだろうか」

横たわり、目を閉じる。もう何も考えなくなかった。

*

「俺だって自分なりに色々と考えてはいるんよ」

ブン・ジョーは、四杯目のバイスサワーを飲むところだった。「それなのに久兵衛の奴、全く聞く耳を持ってくれないんよ」

「そこに理由はあるんか？」

「分かってたらこんなに苦労してないだろ」

「ブン、春雨サラダ食べてみるか？」

「いらない。ポテトサラダのおかわりが良い」

その返答を察していたかのように、オコトさんはポテトサラダが入った器を手にとっていた。

ブン・ジョーは、当然のように受け取り、当然のごとく食べ始めた。

「このままじゃ二の舞なんよ……シージェイの時と同じになっちまう。オコトさん、俺はど

うしたらいいのさ？」

「それをそのまま久兵衛に伝えればいい」

「無理に決まってるだろ。どうせ鼻で笑われて、何か嫌なこと言われるだけだよ」

有楽蝶の外では、太陽がきらりと輝いていた。

「シージェイも久兵衛も特別なんよ」

「なら、ブンも特別になればいい」

「分かってるけど、俺には無理なんよ」

「……」

「アイツらみたいな勇気が欲しい」

『大丈夫だよ。また会える』

ブン・ジョーの頭の中で久兵衛の声が鳴った。

「こんなことになるなら面倒なんて見なきゃよかった」

ひとくち食べたポテトサラダは味気なかった。

背中をむけて離れていく久兵衛の姿が、頭の中を埋め尽くしていたから。

「……これ以上嫌われたくないんよ」

オコトさんは、何も答えなかった。

「どうして久兵衛の面倒を見ろって言ったんよ」

ブン・ジョーはバイスサワーを見つめている。

「……」

目が、離せないようだった。

「ジェイは海の向こう側へ行っただと思うか？」

「……考えたくもない」

バイスサワーから目を逸らした。

「一つだけ言うといたる。近頃のブンはつまらん声でつまらん言葉吐いてつまらん間合いばかりしているから、どんな表情して生きているのが手に取るように伝わってくる」

「誰も俺の気持ちなんて分からないんよ」

「まったく、おこがましい人間だねえ」

と、オコトさんが言う。「……ブン、私がいって言うまで目瞑ってみ」

「え？」

「いいから」

ブン・ジョーは言葉通りに目を瞑った。

暗闇に見つめられている
それを理由に瞳をあけた

「……オコトさん？」

「今、目開けただろ」

「だって何も言ってくれないじゃん」

オコトさんが、ひとつふたつと、間あいだを取り持つために咳払いをした。

「見たくても見えない状態が永遠につづく。不安な時も安心している時も、雨の日も風の日も、今の私はずうっと目が見えん。もし、あんたが私の気持ちになろうとしてその両目を潰したとしても、私の気持ちをすべて理解できることはない。持っている間合いは人それぞれ。ブンの気持ちになれる人間はブンしかおらん。誰一人として自分以外の何者にもなれん」

シージェイの言葉が、不意に現れた。『ブン・ジョーはブン・ジョー』

「分かんねえよ。自分の気持ちなんて」

「耳を澄まして聞いてやれ」

「……でも、もしシージェイとか久兵衛みたいになれたとしても、どうせ誰かに否定されて、変な目で見られたりするだろ」

「それでも物怖じせずに動く者は動く」

「そんな柄じゃねえよ」

「ブン、あんたは優しい人間だ。その優しさが裏返って劣等感になる前に、まずは自分の痛みに気づいてあげんと」

「俺だって久兵衛の背中を押してやりてえし、自分の人生を歩みたいと思うときもあるんだよ。でも今こうして話して思ってたけど……やっぱり、傷つくのが怖くて……自分で自分に蓋をしてしまってるのかもしれない」

太陽の声が、聞こえた。

ブン・ジョーは、知らず知らずのうちに指先を動かしていた。

「頭の中がぐちゃぐちゃ過ぎて何が何だか分かんねえ」

その言葉に反応したオコトさんは店の奥へと消えていった。
しばらくして、戻ってくる。

「ブン」

オコトさんが一冊の絵本を手渡した。

受け取ったブン・ジョーは、古びた絵本に目を向ける。

「……バタフライ・ウオーター？」

操られたように、マウスピースを作動していた。

「そこには載っとらん」

指先が、止まった。

「何これ？」

「いいから読んでみろ」

「……」

「いいから」

その時、ぴゅーと風が吹いて、有楽蝶の暖簾がのらりくらりと揺らめいた。ブン・ジョーは、言葉通りに絵本を開いた。

あるーひ あるーひ 少し昔すこむかし

江戸えどと呼ばれる都市としが栄さかえていた時代じだい

ひとりの赤ん坊あかぼうが生まれ落ちました

彼の産声かれうぶごえを聞いたとき

みんな両手りょうてをあげて喜びましたよろこ

時^{とき}が経^たち 傀儡^{くぐつ}子^{いちぞく}の一族^{いちぞく}のもとに 拾^{ひろ}われた彼^{かれ}は

古^{ふる}びた三味線^{しゃみせん}と出逢^{であ}います

彼^{かれ}にとつて三味線^{しゃみせん}は 唯一^{ゆいいつ}の友^{とも}になりました

奏^{かな}でる音色^{ねいろ}は それは それは 美^{うつく}しかったそうな

あるとき誰^{だれ}かが 彼^{かれ}の音色^{ねいろ}を こう 呼び始め^{よはじ}ました

「まるで黄色^{きいろ}い虫^{むし}の声^{こえ}のようだ」

その名^なは またたくまに広^{ひろ}がり 虚空^{こくう}を超^こえていきます

あるとき誰^{だれ}かが 彼^{かれ}に向かって こう 呼び止^{よと}めました
たすけて！ 黄色^{きいろ}い虫^{むし}の声^{こえ}！ 見^みえない怪物^{かいぶつ}を止^とめて！

わかった！ 見^みえない怪物^{かいぶつ}はどこにいる？

そんなの分^わかるわけないでしょう！ だ^みって見^みえないのだから！

見^みえないのなら見^みつからないじゃないか！

それでも黄^{きいろ}色^{いろ}い虫^{むし}の声^{こえ}なら見^みつけてくれるでしょう？

黄色い虫の声と呼ばれた青年は やむを得ず 言いました

わかった！ かならず探してみせる！

それからというもの
青年は^{せいねん}

来る日も 来る日も
見えない怪物の正体を探し求めます^{みえないかいぶつしょうたいいさがもと}

心を動かしながら

体を動かしながら

仲間と出会いながら

違いを受け入れながら

見えない怪物を見つめるために
あらゆる試験に挑み続けるのでした

そのうち いつのまにか

音^{おと}もなく

少^{すこ}しずつ 少^{すこ}しずつ

青^{せい}年^{ねん}の心^{こころ}から 薄^{うす}れていきます

鳥のさえずりも

川のせせらぎも

仲間の声も

果てしない風景も

それでも青年^{せいねん}は

人目^{ひとめ}もくれず

一心^{いっしん}不乱^{ふらん}に突^つき進^{すす}んでいきます

なが
さいげつ
なが
長い歳月が流れて

もう
こころ
こゑ
心の声も届かなくなったとき

せいねん
われ
わす
青年は 我を忘れて 言い放ちました

み
かんねん
み
ようやく見つけたぞ！ 観念しろ！ 見えない怪物よ！

青年せいねんの声こえは空くうを切きり 誰だれにも届とどきませんでした

それでも青年せいねんは叫さけびつづけます

俺おれには見みえているんだぞ！ 俺おれには見みえているんだぞ！

叫^{さけ}び続^{つづ}ける青^{せい}年^{ねん}に　いつか^{こえ}の声^{こえ}が　こ^よう　呼^よび止^とめます

そ^わんなの分^わかるわけ^みないでし^みよう！　だ^みって見^みえないの^みだから！

青^{せい}年^{ねん}はそ^{とき}の時^{とき}はじ^{とき}めて　そ^りれを理^り解^{かい}した^りのです

あわてて辺^{あた}りを見^みまわします

そこには

なにも

残のこされていませんでした

鳥とりのさえずり

川かわのせせらぎ

仲間なかまの言葉ことば

果はてしない風景ふうけい

そして 黄色きいろい虫むしの声こえも

残^{のこ}されていたのはじぶんの正^{ただ}しさに胸^{むね}を膨^{ふく}らませていた一人^{ひとり}の人間^{にんげん}だけでした

青年^{せいねん}は 跪^{ひざまず}き 心^{こころ}のどん底^{ぞこ}から叫^{さけ}びました

なんて愚^{おろ}かなんだ！ なんて愚^{おろ}か者^{もの}なんだ！

青年せいねんの目めから大粒おおつぶの涙なみだがこぼれ落ちおます

その涙なみだはいずれ 水みずたまりとなり

川かわとなり

海うみとなつて

青年せいねんの元もとへ戻もどるのでしよう

心のどん底からの風景は青年に大なる絶望を与えました

しかし その絶望から眺める景色には一筋の贈り物が添えられているのです

風^{かぜ}に
乗^のって

ど
こ
か
ら
と
も
な
く

声^{こゑ}
が

聞^き
こ
え
て
き
ま
す

あなたの産声を聞いたとき

みんな 両手をあげて喜びました

風^{かぜ}が去^さつたその時^{とき}

誰^{だれ}か彼^{かれ}に呼^よび掛^かけました

世^よ直^{なお}し 世^よ直^{なお}し 建^たて直^{なお}し

青年^{せいねん}はふと我^{われ}に返^{かえ}ります

「そういうことか」

遥^{はる}か遠^{とお}くの空^{そら}を見^み上^あげると

アー

アー

鴉^{からす}の鳴^なき声^{こえ}

浮^うかぶ雲^{くも}が猫^{ねこ}のよう^{よう}な眼^{まな}差^さしで

ニヤー

ニヤー

こち^みらを見^みつめていました

青年^{せいねん}はひとりでは敵^{かな}わないことを　ようやく　心得^{こころえ}たのでした

世直^{よなお}し　世直^{よなお}し　建^たて直^{なお}し

空^{そら}の眺^{なが}めは　それは　それは　美^{うつく}しかったそうな

*

ブン・ジョーが、絵本を閉じた。

「この主人公って久兵衛のこと？」

「私はそう思い込んでる」

「絵本の情報、なんでマウスピースに載ってねえんだ？」

「知らん」

ブン・ジョーは、絵本を手元に寄せて、丁寧に確かめていた。

「作った人の名前すら書いてねえ」

珈琲の香りが漂っている。

「この絵本はな、私が幼い頃にお母ちゃんがよく読み聞かせてくれたんや。私はこの物語が大好きでな、朝から晩までずーっと頭の中で巡らせておった。そのうち青年の姿も、黄色い虫の声も、絵本から抜け出して私の中に住みつくようになってな……当時の私は、頭の中で繰り広げられる物語の世界が、どんどん膨らんでいくことに喜ばしさを覚えた。本当の青年の素顔は？ 黄色い虫の声とは？ 見えない怪物はどこにいる？ ひっきりなしに生みだされる私だけのバターフライ・ウォーターが紡がれていく。この感覚が不思議で仕方なかった。幾日も幾日も、疑問を抱けば納得するまで思案して、じぶんりの答えを見つけてな……ただ、生みだされた物語の答え合わせをどうすればいいのか分からなかった」

ブン・ジョーは、絵本の表紙を見つめていた。吸い込まれるような色使いだった。

「知りたくても知れなかった物事が山ほど残っているままこの歳を迎えて、後は死にゆくだけだと思いつつたけど、久兵衛のお陰でまだ見ぬ心持ちを味わうことが出来ておる。生まれて初めて光を失って良かったと思えた夜もあった」

いつもは強く見えるオコトさんが弱々しく見えた。

でもどうしてだろう、ブン・ジョーは深みのある安心感を抱いていた。

「一体、久兵衛は何者なの？」

「知らん」

「じゃあなんで面倒見ろって言ったんよ？」

「三味線を身に着けていた。だから私の夢を勝手に乗せた」

「それだけ？」

「想いなんてそんなもんだろ」

「久兵衛が何者なのか気にならないの？」

オコトさんは、珈琲を嗜んだ。

「久兵衛が何者であろうが、私は久兵衛と出会って救われた。未だに、光を失ったことも、昔を羨ましがすることも背負い込んではいませんが、それでも、今が幸せだと思い直すことが出来ておる。そのくらいでええんじや。知りすぎても、心が追いつかん」

ブン・ジョーは、指先を見つめていた。

「俺たちは、心が追いついていないんか？」

浮かぶ人間そのものが、空を狭くしているようだった。

「マウスピースの視野に惑わされるなよ」

「……」

「足るを知る。そうだ、昔お母ちゃんによく言われた」

オコトさんの表情は、どこまでも初々しかった。

「ああ何だろなあ、この気持ち……会いたいなあ。お母ちゃんは本当に生きとったんかなあ」

*

庄之助…「会ったよ」

スカンク…「誰に？」

猿川庄之助は、上空に向かって指を差した。

そこには鴉が飛んでいた。

ザンバラ…「あいつに会ったのか」

庄之助の肩に鴉が止まって、みじかく鳴いた。

広がる芝生を背景に、虫が、鳥が、花が、土が、風が、香りが、息をしていた。

太陽が、空が、雲が、誰もが手の届かない場所で見守っている。

庄之助…「まるで黄色い虫の声のようだった」

太陽が反射して、ザンバラのピアスがきらりと光った。

庄之助は、当時の記憶を思い返すように、鼻から深く息を吸った。

*

「……ヒゲ・アトラクション。いい加減、出てきてくれよ」

墓石の前に立つ彼の肌の色は、黄色だった。

「一体、岩佐久兵衛って誰なの？ 本当に江戸から来たのかな？ 過去への手掛かりも未来への手掛かりも掴めない。このままずっと迷子は嫌だよ」

僕は確信した。彼の肩に鴉が止まったんだ。

「やれることはやっているはずなのに一向に近づかないのはもどかしい。オコトさんは何も教えてくれないし、トトにも会えない。ブン・ジョーは文句ばかり言うようになってきた。なあ、ヒゲ・アトラクション……。俺はどこに向かっているのかな？ 江戸に帰りたいのかな？ ツエーマフの存在を突き止めたのかな？ なあ、俺はどこに向かえばいいのかな？」

風に乗って、雲が流れている。

墓石の前に立つ黄色い彼は、身に着けていた三味線を奏で始めた。

「ブン・ジョーはこの音を乱れてるって言うんだ。ヒゲ・アトラクションはどう思う？」

風が吹いて、風を感じた。

僕は思わず、称えていた。「素晴らしい音色だとおもったよ」

「誰？」

「名前なんてどうだっていいんだ。もっと君の音を聞かせて欲しい」

「海の匂いがする」

「ならば、その海の匂いを感じて音を奏でてくれないか」

彼は、僕の言葉を素直に受け止めてくれた。

絶妙な間合いを持って、三味線から音色が聞こえてくる。

僕は、とても嬉しかった。

「……」

「……」

陽が昇れば

踊りましょう

陽が落ちても

踊りましょう

「……」

「……」

真夜中のベルの音

リンリンランラン

ストロベリー

シトシト雨粒が

粹な鯨のミュージック

「……」

「……」

大丈夫だ

大丈夫だ

背中を押す声が聞こえる

「……」

「……」

さよならチューリップ

いつかまた会いましょう

古びた記憶の片隅で

さよならチューリップ

草原くさはらを駆けましょう

再会の場所は富士の夢

「……」

「……この音たち、誰に習った？」

「記憶がないから分からないんだ」

「記憶がない？」

「どこから来て何をさせられているのかも分からない。これからどこへ向かって何をするのかも分からない。だからこの三味線の音色がいつどこで誰に教わったのか覚えていないんだ」

彼の声は、まるで黄色い虫のようだった。

頭で考える前に、伝えていた。「素敵じゃないか」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

拍手を送る。

「そのままできてくれよ」

「え？」

黄色い彼の瞳には、生命が宿っていた。

*

猿川庄之助は桜の木を見つめている。

鴉が、みじかく鳴いた。

庄之助…「もしかしたら彼は本当に、ツエーマフと人間が手を取り合うことを信じているのかもしれない」

スカンク…「庄之助は夢を見すぎだ」

庄之助…「そう感じさせる音色だったよ。でも、まだ気が付いていないようだった」

ザンバラ…「仮にあいつが黄色い虫の声だったとしても、我々の助けも受けずに自力で何が出来た。自覚していないのなら、尚更だ」

庄之助…「……」

ザンバラ…「どの道、再び桜が咲く頃には願いが叶う」

庄之助…「ザンバラはそれでいいと思ってるの？」

ザンバラ…「……もちろんだ」

庄之助…「そっか」

スカンク…「庄之助、夢を見るのも大概にしておけよ」

庄之助…「……」

スカンク…「聞こえてんのか？」

庄之助…「……」

スカンク…「いつまで眺めてんだよ！」

庄之助…「……」

枯れても、美しかった。

庄之助…「あの瞬間、僕はもう一度信じてもいいと思えた」

ザンバラ…「たかが人間一人に何が出来る。同じ過ちは二度と繰り返したくないものだ」

てんとう虫が、スカンクの目の前を横切った。

スカンクは、必死になって追いかけた。

*

「ヒゲ・アトラクションのテーマソングが流れている」

むかしはこうして、よくバンジローを弾いたもんだ。

ヒーゲ、ヒーゲ、アトラクション。ヒーゲ、ヒーゲ、アトラクション。

弾きたい音を弾きたいように奏でてよ、ハチャメチャな旋律でも誰も何も咎めなかった。陽気に陰気にしなやかに、その時々的心持ちを素直に音に乗せたもんだよ。

上手いとか下手とか、ながいとかみじかいとか、流行りとか廃れ^{すた}とか、そういったものに囚われずに生き生きと弾いて、心からの想いが解き放たれたときには拍手の音が大きく聞こえてきたわいな。

唐突だけど、言いたいから言っちゃう。

ここまで読んでくれて本当にありがとう。

あのよ、あの世にいとよ、しみじみ思っちゃうんだ。『生きている』というだけで凄い

ことを成し遂げているんだよなあって。この気持ちは、死んで初めて分かったよ。

生きているだけでも凄いの、休む暇なく、家族を持ったり、育児をしたり、恋をしたり、食べたり、飲んだり、遊んだり、夢を見たり、呼吸をしたりする。ま、あの世の俺はもう呼吸をする必要なんてないし、そもそも息をしていない。(ブイサイン)

あのよ、息をしていればよ、数多くの理不尽や不条理に出くわして投げ出したくなっちゃう時だってあるよな。なにが正解でなにが不正解かを求めれば求めるほど、それで、求められるほど答えなんて見つからずに自分自身を窮屈に縛り上げちまう。

じぶんがどんな状態であっても、時間は止まることなく、家族を持ちつづけたり、育児をしつづけたり、仕事をしつづけたり、呼吸をしつづけなければならない。

なんちゅうすげえこと遣^やって退^のけてるんだ！

その真実だけでも、ちゃあんと自分自身に言い聞かせて欲しいのよ。これは当たり前じゃないんだ！ 私は凄^やいことを遣^やって退^のけているんだ！ 僕は凄^やいことを遣^やって退^のけているんだ！

みーんな、色んな想いを背負って生きている。何も背負ってねえ人間なんて一人もいねえから！ 生きてるだけで凄^やいんだから！ たまには息抜きも必要なんだから！

あのよ、あの世の人間はよ、みーんな、天から見守ってんだ。

息を引き取った爺ちゃんも婆ちゃんも、父ちゃんも母ちゃんも、恩師も仲間も、愛犬も愛猫も、大切な存在は、みーんな、あんたに届くように大声あげて応援してるんだ！

先祖であっても先祖でなくても、みーんな、あの世の人間は、生きている人間を必死で応援している。それを、忘れないで欲しいんだ！

疲れた時とか、くよくよした時とか、何も考えたくない時とか、ふらっと墓を参って、俺たちあの世の存在に、今思う不安とか心配とか、ウキウキとかモヤモヤとか、悩みとか楽しみとか、『今生きている』ということ、たーくさん教えてほしいのさ！

俺たちはいつでもどんなときでも、心を穏やかにして待ってるからよ。(ブイサイン)

この世は、愛だぜ。

愛するエネルギーで回っているんだぜ。



季節の変わり目は妙だ。細胞が、激しく入れ替わろうとしているのだろうか？

地下都市に降り立ってから三百回眠った。初めて浴びた季節の匂いが、鼻の奥を通り抜けていく。溢れるおもしろい、言葉になった。

「懐かしい」

見慣れた空は、単なる空だった。

変わらない日々を繰り返し、少しずつ、少しずつ、日常に溶け込んでいく。大袈裟に意気込んでいたあの頃のじぶんはどこへ行ってしまったのだろうか？

何をしていいのか、分からない。何がしたいのかさえ、分からない。何不自由なく生き抜けるこの暮らしに、かつての熱量が薄れていく。江戸に帰る手掛かりも、ツエーマフを突き止める手掛かりも、見当たらないことが当然であるかのように思い込み、ブン・ジョーと文句を言い合い、何も教えてくれないオコトさんと有楽蝶で世間話をする。ジミーのところにカレーパンを買いに行き、手を合わせても出てきてくれないヒゲ・アトラクシオンに独り言を聞いてもらう。

ザンバラもスカンクもトトも、夢で会うだけだった。

名前も知らない青色の肌の人間に言われた、『そのままでもいいよ』という言葉がふとしたときに蘇る。

今日もいつもと同じように空を眺めていた。

右側から心地よい風が、ぴゅーっと吹く。

空に浮かぶ雲が、猫のような眼差しでこちらを見つめていた。

「俺って熱い？」

「私って青い？」

「僕って我がまま？」

「吾輩は、猫？」

どうしてだろう、何もしていないのに風向きが変わった。

その瞬間、繋がっていた意識が曖昧になった。

まるで次元を塗り替えられたような覚束^{おぼつか}なさ^さが肉体を駆け巡っている。

「記憶ってなんだろう？」

夢を見ているのか、現実を味わっているのか。過去なのか未来なのか。いいのかわарいのか。面白いのかつまらないのか。春なのか秋なのか。春雨サラダなのかポテトサラダなのか。

六なのか七なのか……。印象的な記憶たちが押し寄せて、無理やり繋ぎ止められたような世界観が頭の中に流れつづけていた。

目を瞑って、身を委ねることしかできなかった。

*

「そんなんだからシージェイがいなくなったんだろ！」

もう、限界を超えていた。

それはブン・ジョーも同じだった。

「おい！ 言って良いことと悪いことがあんだろ！ 俺だって我慢してるんよ。正体不明の人間とずっと一緒にいて面倒見てやってるんよ？ 俺がいなかったら生きていけなかったくせに偉そうなこと言ってんじゃねえよ！」

「……」

「俺が助けてやらなかったらお前はこの地下都市で生きていけなかった。俺がいなかったらダブルピンチヨスシーの味も知らなかっただろ！ もう、一緒にセッションもできなくなっちゃった。最近の久兵衛の音は乱れすぎて合合わせることすらできねえ」

「これは乱れてるんじゃない。新しい音だよ」

「そうやって言い訳ばかりすんな」

「ブン・ジョーの方こそ何も変わってない」

「違う。これは安定してるだけだ」

降り注いでいた雨は、もうすでに弱まっていた。

「今まで自分の想いを犠牲にして久兵衛の想いに寄り添ってきた。神の社にも連れてってやったし、リリーのライブも見せてやった。お前がマウスピース持っていない頃は一人じゃ帰れねえからって何度も待ってやった。何時間も待った時もあったよな？」

「こっちだって別に弾きたくもないのに毎日セッションに付き合ってたよ。マウスピース持っていない頃はブン・ジョーの行きたいところばかり連れていかれるのが嫌だった」

「久兵衛の三味線の音に合わせて自分の音を殺した日もあった。初めて久兵衛がここに現れた時、混乱するお前を見てダブルピンチヨスシーを食わせてやりてえと思った。今思えばあれも間違いだったのかもな。一人で全部食べれば良かった」

「今更そんなこと言うなよ」

「オコトさんに面倒見ろって言われたから仕方なく見てやってるけど、面倒なんて初めから見なきゃ良かったのかもな」

「そうやってすぐ誰かのせいにする」

「行きたくもないのに海にも行った。シージェイにも会えねえし、息苦しくなっただけなんよ。あれ以来、もっと海が嫌いになった」

「海に連れて行ったのはそっちだろ」

「久兵衛なら変えてくれると信じてたけど、何も変わらなかった。期待してた俺が馬鹿なんよ。どうせ全部、俺が悪いんよ。この先もずっと変わらない。おい、久兵衛。こんな無様な俺に何とか言ってみろよ」

雲に隠れている太陽は、雲に隠れたままだった。

「自分のことばかりじゃん」

「……そのなにか悪い？」

「いつもウジウジして誰かのせいにして」

「……」

「どうしてシージェイと一緒に海の向こう側に行かなかったんだよ」

「行けるわけないだろ」

「そうやって自分で限界を決めるなよ」

「お前らみたいに勇気がねえんだよ！」

「でも本当は一緒に行きたかったんだろ？」

波の音が聞こえる。

ざぶん、ざぶん。

ざぶん、ざぶん。

「……海の向こう側なんてあるわけねえだろ」

「え？」

「俺が、もっとちゃんと止めれば良かったんよ」

「……」

「なあ、シージェイはどこ行っちゃった？」

波の音が聞こえる。

ざぶん、ざぶん。

「なあ、久兵衛」

「……」

「シージェイは、死んじゃったんか？」

ゴーン。

鐘の音が、轟いた。

「シージェイは、死んでしまったのかな？」

「気になるんか？」

と、オコトさんが言った。

「……うん」

「遅かれ早かれ人は死ぬ」

「そうだけど、残された人間はどう感じるのかなあとと思って」

「久兵衛は海の向こう側があると思うか？」

「あつて欲しいと思ってるよ」

有楽蝶は今日も有楽蝶だった。

「お前は自分のことを人間だと言い切れるか？ 私のことを人間だと言い切れるか？」

「え？」

「この地下都市で暮らしている者が全員人間じゃなかったらどう思う？」

「急にそんなこと言われても」

「なあ、人間ってなんだろうか？ どうして私は光を失った？ あんたは一体、どこから来た？」

有楽蝶は明日も有楽蝶だろう。

「……」

「……」

「……オコトさん？」

「ちょっとまっとって」

「……」

しばらく経って、オコトさんの手から絵本が手渡された。

「……バタフライ・ウォーター？」

絵本をめくる音は、純粹だった。

「これは？」

「私の宝物」

「この主人公って」

「私はあんだであると思いたい」

「ここにも黄色い虫の声……」

表紙に描かれた絵から目が離せなかった。

「オコトさん、この言葉知ってる？」

思わず言葉を洩らしていた。「ないがしろにした報いが災いをもたらし、欲望のままに真心を損なうのであれば緑の群れが反逆を行う。折れた翼が死を持って黄色い虫の声に託し、すべてが手を取り合うだろう。さすれば、水の如く蝶が舞う」

「知らん」

「そっか」

「晩年を迎えても知らんことばかり」

この表紙の絵、どこかで見たことがある。

「あんただけには見せるつもりなかった。でもなあ、近頃お母ちゃんに会いに行く夢ばかり見る。なんだろうなあ、この気持ち……。やっぱり、知りたいものは知りたい。けれど、本当に知りたいものを知るのは、いくつになっても怖いなあ」

オコトさんの声は、震えていた。

「なあ、黄色い虫の声。死んだらどこへ行く？」

ゴーン。

鐘の音が、轟いた。

「おい、どこ行くんだよ！」

鴉の背中を、追いかけていた。

慣れた手つきで親指と人差し指を二度合わせた。

「地下都市に動物はいないんじゃないのかよ！ お前は一体、何者なんだよ！ なんですつと現れなかったんだよ！」

頭の中には、あらゆる選択肢が浮かんでいた。けれども、鴉の行く先は分からなかった。「教えろよ！」

指先が、止まる。あの鴉はどこへ行く？

「アーホォー、アーホォー」

鴉は止まることなく、そのまま視界から消えた。

気流に乗ることなく、立ち止まる。空を見渡し、鴉を探す……。

「アーホォー、アーホォー」

鴉の声だけが、虚しく耳に響く。

空には、人間が浮かんでいた。

「ちくちよう！」

啜えていたマウスピースを思いっきり地面に叩きつけた。

頭の中に転送されていた選択肢が消える。

「なに迷ってんだよ！ もう二度と現れないかもしれないんだぞ！」

微かに、鴉の声が聞こえた。

「アーホォー、アーホォー」

無理やり呼吸を整える。

「……仕方ない。急に現れたアイツが良くない」

「……アーホォー……」

やがて、消えた。

「今のは忘れよう」

地面に転がるマウスピースを当たり前のように拾おうとする。

ここで暮らしているとすぐに大事なものを見失う。

「え？」

陽の光が射し込んだ。

「トト？」

マウスピースに伸ばした手を、止めていた。

ゴーン。

鐘の音が、轟いた。

墓石に向かって手を、合わせていた。

「……ヒゲ・アトラクション。相変わらず何をしていいの分からないよ。過去も未来も掴めないまま、代り映えのない時間を繰り返して、あつという間に一日が過ぎていく。ヒゲ・アトラクション……。俺は、このままでいいのかな？　どう思う？　時々まだ見ぬ未来もまだ見えぬ過去も、知ってどうするんだって思うときがあるんだ。初めは、必ず江戸に帰らなければならぬと思いついてた。でもこの間、ジミーのカレーパンを食べてた時に初めて感じたんだ。このままでもいいのかもしれないって……。分からないよ？　ただの言い訳かもしれないし、逃げているだけかもしれない。じぶんの言葉も、じぶんの想いも、一貫しているわけじゃないと思うし、常に迷いの中にいる感覚は、地下都市に降り立つてから一度も拭えていないからさ……」

「食べる？」

と、誰かの声が鮮明に聞こえてきた。

声のする方向へ視線を向ける。

そこには、チョコレイトを手を持つ人間が立っていた。

「エメラルドエウレカ味」

彼の肌の色は、青かった。

「あ、また会えた」

どうしてだろう、彼の存在に安堵している。

青色の彼が言った。「よくこの場所に来るの？」

霊園の空を見渡す。

時の流れが、ほのぼのとしていた。

「ここには沈黙があるから」

「チョコレイト、食べる？」

首を、横に振った。

「何かを探しているんでしょう？」

彼の表情は不思議なくらい整っていた。「ずっと、そんな顔をしている」

「ずっと？」

「地下都市はとても騒がしい」

彼の声は、驚くほど小さかった。けれども、しっかり耳に届いていた。「じぶんには必要のない音が聞こえて、必要のない言葉が飛び交う。必要のない心持ちが揺れ動いて、必要のないものばかり探してしまう。そうだろう？」

どうしてだろう、彼の名前が知りたくなった。

「相手にするな。相手にしないのも一つの選択肢、立派な強みだ」

気流に乗る人間たちの姿が遙か遠くに浮かんでいた。

「君の行き先を見失しなわないで欲しい」

「ありがとう。でも、どこに向かえばいいのか分からないんだ」

「簡単だよ」

その時、ぴゅーっと風が吹いた。

「十五夜の夜に自分の足で神の社へ向かえばいい」

「……自分の足で？」

「僕、何か変なこと言った？」

「だって無理でしょ。マウスピースがないと……」

「マウスピースがなければ移動できないって誰が決めた？」

「え？」

頭が、真っ白になった。

『「つだけ忠告しといたる」』

オコトさんの声が、頭の中で鳴った。

『無用な情報ばかり拾っていると本当に大切な瞬間を素通りすることになる』

「試したことは、ある？」

「……ないけど」

「勝手に決めつけると、見えるものも見えなくなる」

急に、世界が無限大に感じた。

「じゃあライブ会場へのパスコードは？ 連動させていたカメラの映像は？」

「それは自分で試してみるといい」

「ねえ、地下都市って何なの？」

彼はその問いには答えなかった。

「どうして俺の向かう先を知ってるの？」

「この間の音色が物語っていた」

「三味線の……」

「世界を広げた分だけ、己の愚かさに絶望する。それでも、諦めなければ希望に変わる」

「え？」

「健闘を祈るよ」

彼は、去っていく。

「待って！ 名前は？」

「名乗るほどでもないよ。今はね」

と、青色の彼が返した。

「今は？」

「また出会う時が来るから」

「どうして分かるの？」

「この物語において僕はいずれ、主要人物になる人間だからね」

彼は瞳も青かった。「今回はこの辺りで退くよ。またね、黄色い虫の声」

ゴーン。

鐘の音が、轟いた。

スカンク…「あいつが、黄色い虫の声なのでしょうか？」

ザンバラ…「それは分からない。でもなあスカンク。あいつと出会ってから、今まで考えもしなかったことを考えるようになったのは確かだ。人間として生まれ変わって、長い間の地下都市で暮らしてきて近頃思うのだ……。頭で思考して心で感動する。この矛盾の中で生き抜く人間の想いはその人間にしか分からないということ。人間として生きるのも大変だ」

スカンク…「ザンバラさんが、そう感じたのですか？」

ザンバラ…「ああ。それでも我々ツエーマフ一同の想いを背負って、自然の摂理を取り戻すことに変わりはないが、少しだけ、人間という生き物の美しさを見つけた。そんな気がするのだ」

ゴーン。

鐘の音が、轟いた。

「ようやく見つけてくれた」

十五夜のお月様が、天から見守っている。

「リリー・ハレルヤ」

と、伝えていた。

「あなたにはトトって呼んで欲しい」

彼女は素足だった。足元には、枯れ葉や落ち葉が横たわっている。

「ねえ、地下都市って何なの？」

鴉が三回、

アー

アー

アー

と鳴いた。

「まずは、言うことがあるんじゃないの？」

神聖な空間が、ふたりを包み込んでいた。

「ずっと会いたかった」

「私も、会いたかった」

風だけが、踊っている。

「このレインコート、似合う？」

「とても似合ってる」

「どうして会いに来てくれなかったの？」

「記憶がないんだ。地下都市に降り立つまでの記憶がごっそり抜け落ちている。それは今も変わらない」

「もしかして、私の名前も忘れてた？」

「トトの事は一度も忘れなかったよ」
どうしてだろう、強がりだった。

「ありがとう」

トトの足元に視線を移した。

「今日はイカしたスニーカーじゃないの？」

「履きたくて履いているわけじゃない」

「とても似合ってたよ」

「それは嬉しいけど、こっちの方が好き」

トトは、地面から右足を離した。

彼女の足の裏が見えた。

「とても似合ってる」

と、伝えた。

大木から枝分かれしたその先端に連なる葉。

その一枚一枚の在り方は、すべてが意思を持ち、すべてが違っていた。

「ここで何してたの？」

「ラジオ、聴いてた」

トトの足元にはラジオが置かれていた。

長閑な雰囲気だった。

月明かりが地面を照らし、吹く風が、生命の生き様を醸し出す。

感情の起伏、誰かの言葉、誰かの行動、鴉の飛行術、空の青さ、雲の白さ、太陽の赤さ、風の儚さ、海の広さ、視野の狭さ、人間の仕草、夢の果てしなさ。

数々の影響が肉体に染み渡っていることを察し、この二つの目で見る景色は、決して自分の想いだけで彩られているわけではないことに勘づいた。

「ありがとう、思い出させてくれて」

「なんのこと？」

「ここで暮らしているとすぐに大事なものを見失う。初めて出会った時、トトが伝えてくれた言葉。この言葉がなかったら俺は今ここにいなかったかもしれない」

鳥居、砂利、大木、石像、手水舎……。それだけで安心した。

「役に立ったのなら良かった。いつ何時どこでなにが起こるかなんて誰にも分からないけ

ど、言葉はいつも誰かの背中を押している」

虫の声が、背景を彩っていた。

「言葉は最後にぼろりと零れ落ちるものなんだから」

「最後？」

「感じた心に乗せる最後のおまじない」

視線の先にはトトの姿があった。

紛れもなく、トトだった。

「地下都市に来てからずっと気になっていることがある」

「なに？」

「心が、言葉に呑みこまれていくようだった」

空を見上げる。

十五夜と、目が合った。

「あらゆるところで言葉が飛び交っていて、頭の中には思いや記憶が当然のように浮かんでいて、いつでも繋がっているような感覚の中で、時には監視されているような感覚の中で生きるようになっていった。そのうち、自分の心が分からなくなると、それでも繋がるために言葉を扱って、意味を受け取って、本当に想っていることを伝えているのか受け取っているのか分からない瞬間が沢山あった」

「本当に想っていることを言葉に乗せても伝わらない。けれども、本当に想っていることを言葉に乗せないと伝わるものも伝わらない」

頭の中には出口のない迷路が浮かんでいた。

そのまま、言葉にする。「まるで出口のない迷路のようだ」

「そう。私たちは、あべこべの世界で生きているのよ。三百六十度の思いが敷き詰められた球体の一部として生きている。どの場所から見ると、どの角度から捉えるのかによって受け取る思いや芽生える思いがいかにようにも移り変わり、口にする言葉も変わる。だから、分かり合える事と分かり合えない事が当然のようにあって、そして残念ながらもただ向き合ったとしても、永遠に分かり合えない事柄も数多く存在している」

真実を知ることが、すべてではないのかもしれない。

「自分がどこから来たのかも覚えていない。どうして三味線が弾けるのかも分からない。自分が岩佐久兵衛であるという違和感がずっと頭から離れない。だから、自分の言動を信じ抜くことができなかった」

「あなたは至って全うよ」

「まっとう、どこが？」

「みんな、そういう境遇に立たされているんじゃないのかしら？」

空は、空だった。

「私も思うよ。生まれてきた記憶もなければ、どうやって育ったのかも分からない。記憶が芽生えたときには名前を呼ばれていて歩まなければならぬ道を歩んでいた。形は違うけれど、それと同じようなことじゃないのかしら？」

月は、月だった。

「ただ忘れているだけでみんな久兵衛みたいに本当は自分が何者なのか分かっていないんだよ。でも久兵衛は諦めることなく、ずっと自分が何者であるのかと向き合った」

「じゃあトトは何者なの？」

八秒という時間を扱って彼女は舞った。

そこに、言葉は現れなかった。

「じゃあリリー・ハレルヤは？」

「晴れやかさの象徴」

リリー・ハレルヤの姿が頭の中に現れる。

熱狂的な歓声が、それに続いた。

「彼女はトトが兼ね備えている晴れやかさを一貫して表した人格」

月明かりが、鴉を照らした。

鴉は、鴉だった。

「これを見せたかったの」

彼女は、ポケットから小さなナイフを取り出した。

「え」

忘れていた記憶が一斉に押し寄せてくる。

気さく、緑色の肌、花瓶、水槽、プール、お立ち台、信号機、ネオン、踊り、表情、ユーロビート、黒い首輪、色気、心臓の音、チークタイム、首飾り、自然、若者、騒がしい、プールサイド、老人、ナイフ。

今までの自分を、ちっぽけに感じてしまう程の奥ゆかしさが肉体を巡る。

ナイフを掲げたトトが言った。

「この物語において、あなたは選ばれた存在になった」

あいつの姿が、舞い戻ってくる。

あいつの吐息が、耳元で鳴った。

「キルバードが、あなたを選んだ」

「キルバード？」

「プールに浮かんでいたあいつの名前」

彼の名前を初めて知った。

どうしてだろう、彼がプールに落下した時に露わになった水しぶきの高さや幅が手に取るように頭の中に映し出され、そのまま目の前で輪郭を宿した。水滴の香りが舌の上に蘇り、ぎゅーっと胸が締め付けられていく。

「自分の死と引き換えにあなたに未来を託した」

\$ # “ % .. ¥ ¥ ¥ .. & & .

「……未来を託した？」

「ねえ、久兵衛」

と、トトが言う。「今から話すことは正直、久兵衛にはよく分からないと思う。でもね、私はあなたに伝えなければならぬ。だから心を静かにして、私の話を聞いてくれる？」

「……分かった」

それから、トトは一言も喋らなくなってしまった。

横たわる落ち葉が、二人の様子を見守っている。

「……」

「……」

「……どうしたの？」

「ううん。やっぱり、なんでもない」

言葉が途切れた。虫の声も消えていた。静けさだけが居残り、月が照る。沈黙を埋めるように、そっと、ラジオの音が寄り添ってくれた。

「……このままエンディングに向かう予定でしたが、まだ時間が余っているので今日は特別にもう一枚だけ読んじゃいまーす。選ばれたあなたは超ラッキー！ きっと世界を揺るがすようなスーパーパーハッピーな出来事が、あなたの元に訪れますよ……って、さすがにそれは大袈裟か！ それではいつてみましょう！ 本日最後のお便りは……これだ！ ラジオネーム、イカしたスニーカーさん。どうもありがとう！ 心を込めて読ませて貰いますね。

雨の匂いが、した。

『私は昔から、伝えたいことを伝えようとする時、言葉が出てこなくなります。恥ずかしいのか、怖いのか、勿体ないと思うのか……。理由は分かりませんが、本当に想っていることを言葉にするのが苦手です。陽気な自分を装うのは得意なのに……。この間、送ってくれたレインコート、隠れて着ています。とってもお気に入りです。』

今こうしてハガキを書いているのは、想いを伝えたい相手がいるからです。本当は会って直接伝えたいのですが、会いに行く勇気がありません。何度も会いに行こうとしました。何度も伝えようとしてしました。でも結局、会いに行く一步を踏み出ませんでした。でもね、彼も彼でなかなか会いに来てくれないんですよ？ 夢では沢山会いに来てくれるのに……。

だから私は今、彼に手紙を書いています。彼がこのラジオを聴いているのかは分からないけど（聴いていない方が安心するかもしれない）、これが私にできるせめてもの勇気です。届くのかも分からない想いを書いているだけに、頭の中はぐちゃぐちゃです。

それでも、震える手を感じて一文字ずつ書いています。どうか、この想いが届きますように（届かない方が安心するかもしれない）。

黄色い虫の声へ

この世のどこかにツエーマフの村があります。彼らはみんな緑色の肌をしています。あなたにはそこへ向かって欲しいの。そこに行けば何かしらの手掛かりが掴めると思っています。でも、どこにあるのか分かりません。ある人が言うには、一面砂漠で埋め尽くされていない場所の遙か先、とても過酷な道のりが待っているみたいです。私は一生、ここから出られない身。それは生まれた時から決まっていたこと。先祖代々その仕来りを守り抜いてこままで受け継いできました。いつか、この想いを誰かに託せる日が来ると願ってお婆さまもお母さまも皆、生き抜きました。この場所を作りあげたのはツエーマフだと言われています。だから私たちの代わりにツエーマフの村へ行ってこの場所の真相を解き明かして欲しいの……

…。得体の知れない時の流れに追われるのはもう、懲り懲り……って言っても、あなたには何が何だかさっぱり分からないわよね……。私の事なんてもう忘れているかもしれないし、あなたの使命をもう見つけているかもしれないし、この世にはもういないかもしれない……。会えないって寂しいですね。会えるって素晴らしいですね……。あなたがどう思っているかは分からないけど、私はずっと、あなたに会いたいです。そして、あなたが変わらなく心穏やかに過ごせていることを願っています。

P・S たすけて、黄色い虫の声。見えない怪物を止めて』

……。べったんこーりや、ホイホイホイサのホホイのホイー。イカしたスニーカーさんの想いが、彼に届きますように！ 勇気があってもなくても、わたしはイカしたスニーカーさんから勇気を貰いました！ 彼に届いているといいな……。そんな、わたしからあなたへ。この曲を届けたいと思います。イカしたスニーカーさんみたいに勇気が出ないそのあなたにも届けます！ 勇気があってもなくても、あなたはあなたに変わりののですから、あなただけの人生を見つけて欲しいものです。それでは、お聞きください。『ウラー・ウツラツラー』で『真似事はもう終わりにしないか』

心が、どうしようもないくらい揺れ動いている。

ラジオから流れる曲が背中を押してくれた。

「トトはこの言葉知ってる？」

ちゃんと目を見て、想いを伝えた。「ないがしろにした報いが災いをもたらし、その忠告を受けず真心を損なうのであれば緑の群れが反逆を行う。折れた翼が死を持って黄色い虫の声に託したとき、すべてが手を取り合うだろう。さすれば、水の如く蝶が舞う」

夜なのに、陽が差した。

「……ツェーマフの真言。久兵衛が……どうして？」

ゴーン。

鐘の音が、轟いた。

プールサイド。

漂う水。

奥に、梯子。

あの時のまんまだった。

風が吹き、

鳥が鳴き、

水が揺れ、

草木がさんざめく。

「キルバード」

もう、あいつではなくなっていることに気がついた。

『自分の死と引き換えにあなたに未来を託した』

プールに浮かぶキルバードの背中を見つめていた。

描かれた絵が、オコトさんから手渡された絵本の表紙と同じだった。

「あの時、何を伝えようとしてくれたの？」

この言葉を皮切りに、キルバードの背中に向けて語り掛けつづけた。

でもどうしてだろう。どれだけ伝えても、どれだけ願っても、生き返ることはなかった。もちろん分かっている。それでも、想いが溢れて言葉が止まらなかった。

「……キルバード。俺、行ってくるよ」

それから、一曲だけ三味線を弾いた。

風の音が聞こえる。

草木の匂いが鼻の奥へ通う。

目に見える色は物静かで、空間が抱擁してくれているようだった。

キルバードに向けて、両手を合わせた。

想いを込めて瞳を瞑った。



パツと目を開いた。辺り一面、砂だった。
空を、見上げていた。

「今まで何やってたんだろう」

二十羽程のカラスが一斉に舞い、アーアーと音を立てている。

ブン・ジョーの、トトの、オコトさんの、ザンバラの、スカンクの、名前も知らない青い肌の人間の、ジミーの、ヒゲ・アトラクションの、キルバードの、空に浮かぶ人間たちの、さまざまな言葉や仕草や想いが、記憶となって肉体に残っている。
懐かしむことを覚え、過去を手にしていることを知った。

アー

アー

アー

群れの中の一羽が方向転換。素早く一直線にやってきて、止まることなく目の前を通り過ぎた。流れに沿って振り向こうとする。

「振り向くな、前を見つづけろ」

聞き覚えのある声だった。

「ヒゲ・アトラクション？」

もう一度、振り向こうとする。

「振り向くな、この果てしない風景を見つづけろ」

ヒゲ・アトラクションの声に、従った。

背後に、カラスの姿を感じている。

「……分かったよ。でも一つだけ言ってもいい？」

「百でも五百でもいいぞ」

「どうしてずっと現れなかったんだよ」

「ずっと見守っていた」

「見守るだけじゃ意味ないんだよ」

その言葉はすぐに、自然の果てしなさによってかき消されてしまった。

「地下都市は、どうであった？」

「……」

「その目で何を見た？」

「……」

「……」

「……分からない事だらけで不安で心配でずっと迷ってたよ」

「羨ましい限りだ」

「羨ましくなんかないだろ」

「人間は偉いか？」

「……」

「……」

「……」

「もう一度だけ聞く。人間は偉いか？」

「……やっぱり、分からないよ」

「それでいい」

「……え？」

地下都市での暮らしが、幾つも浮かんできた。

喜びも、怒りも、哀しみも、楽しみも、浮かんできた。

「これからどこへ行くつもりだ？」

「……ツエーマフの村」

先の見えない風景を見つめていた。

そこには、空があつて、砂があつた。地平線が彼らを二つに分けていて、ときたま風が吹いている。

カラスが、右肩に止まった。

「仕方ないのう。案内してやる」

その時、ぴゅーっと風が吹いて又、ぴゅーと風が吹いた。